

1989

白岩城跡（里古城）

長野県佐久市上平尾白岩城跡（里古城）発掘調査報告書

1989年3月

長野県佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は、1988年8月18日～10月19日にわたって発掘調査した、長野県佐久市大字上平尾字古城跡に所在する白岩城跡（里古城）の調査報告書である。
- 2 本調査は、林幸彦・羽毛田卓也を担当者とし、地元他多数の方の協力を得て実施した。
- 3 本調査は、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 4 本書に挿入した遺構の実測図作成には、羽毛田・内藤治伸・内山克己があたり、遺物の実測図作成は、羽毛田・内藤・内山が担当した。また遺構・遺物のトレースは、羽毛田・細萱ミズズ・小林よしみが行った。掲載した写真は羽毛田が撮影した。
- 5 本書の執筆・編集は、羽毛田が行い、林が校閲した。
- 6 出土した全ての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
- 7 発掘調査にあたり、御指導・御協力をいただいた方々に、記して厚くお礼申し上げます。

（順不同・敬称略）

笹沢浩、神村透、児玉卓丈、金井塚良一、桐原健、前原豊、川島雅人、小坂井孝修、花岡弘、丸山敏一郎、臼田武正、寺島俊郎、近藤尚義、関川尚功、川上元、木下亘、堤隆、福島邦男、田中正二郎、高村博文、三石宗一、小山岳夫、羽毛田伸博、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、木内晶義、助川朋広、島田恵子、沢田正昭、肥塚隆保、由井茂也、黒岩忠男、井出正義、宮下健司、森島稔、塩入秀敏、郷道哲章、森泉かよ子、百瀬長秀、市沢長秀、小平和夫、竹内稔、新井真博、矢島宏雄、佐藤信之、山根洋子、矢口忠良、神沢昌二郎、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢聡、小林康雄、長崎元広、高林重水、小林正春、桜井弘人、山下誠一、諏訪間順、諏訪間伸、鳥居亮、片山徹、岡村渉、上村安生、田村孝、古郡正志、小島純一、清野利明、木内捷

凡 例

1 遺構の略称

D→土 坑 M→溝状遺構

2 遺構及び遺物の縮尺は、挿図中に記してあるので参照されたい。

3 挿図中におけるスクリーントーンは下記のをあらわす。

1) 遺構 断面→斜線 ※その他は図中に明記した。

4 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに統一し、水系ラインに水系標高として明記した。

5 重複遺構は、新しいものの上端を実線で表示した。

6 写真図版中の遺物の縮尺は、挿図の縮尺と同一である。

7 写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。

8 遺物番号は簡略化し、第6図の4は6—4とした。

9 各一覧表の数値について、不明は一、現存値は〈 〉、推定値は()とした。

10 遺物の実測は、第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

11 遺物胎土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 1987

『新版 標準土色帖』の表示に基づいた。

本文目次

例 言

凡 例

本文目次

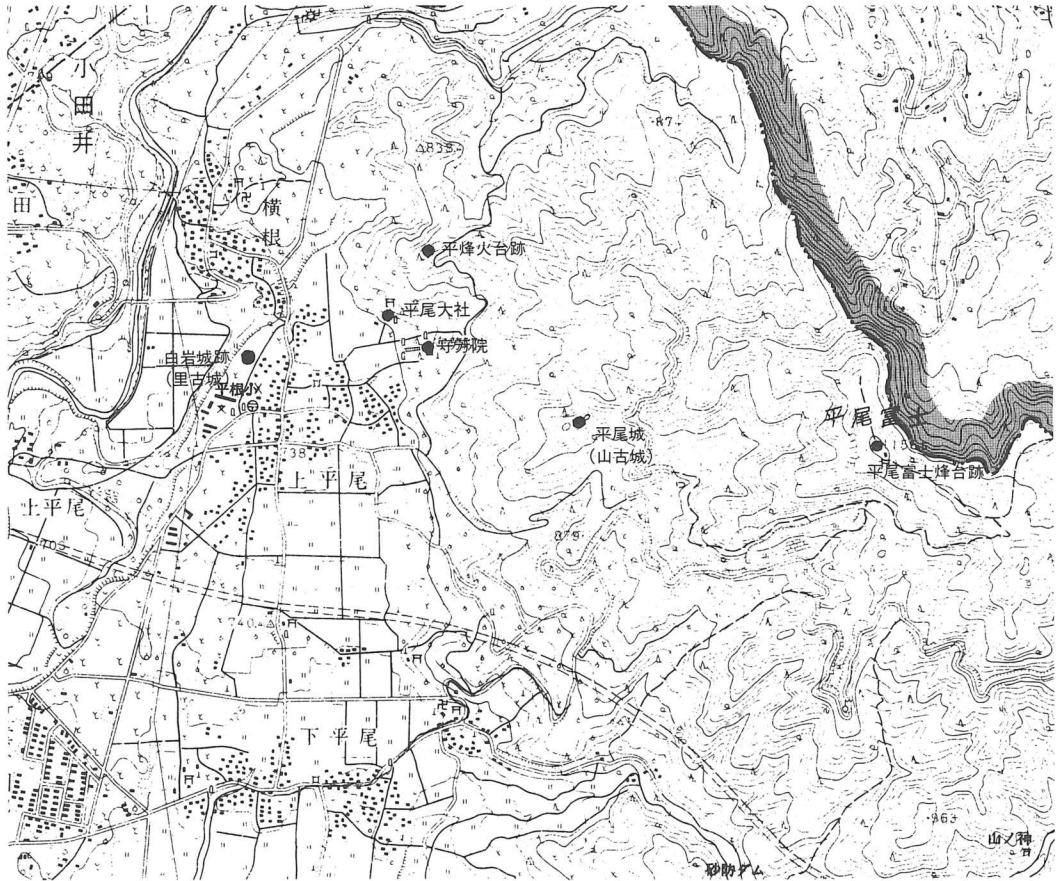
第I章 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	2
3 調査日誌	3
4 発掘調査の方法	4
第II章 遺跡の環境	5
第III章 層 序	9
第IV章 遺構と遺物	11
1 土 坑	11
1) D1号土坑	11
2) D2号土坑	12
3) D3号土坑	13
4) D4号土坑	14
5) D5号土坑	14
2 溝状遺構	14
1) M1号溝状遺構	14
3 堀・土塁	15
第V章 総 括	53
参考文献	
写真図版	

第 I 章 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

白岩城跡は、佐久市大字上平尾に所在し、浅間山に源を発する湯川の浸蝕による標高741m～745mの台地上に位置する。

今回、佐久建設事務所が行う県道草越・豊昇・佐久線改良工事事業に伴い、同事務所と佐久市教育委員会とで協議の結果、本城跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が主体となって発掘調査をする運びとなった。



第1図 白岩城（里古城）跡他関係諸遺跡等位置図（1：25,000）

2 調査の概要

遺 跡 名 白岩城跡（里古城）

所 在 地 長野県佐久市大字上平尾字古城跡955・963・宿988—10他

調 査 期 間 1988年8月18日～1989年3月31日

調査団の構成

〔事務局〕

教 育 長 大井昭二

教 育 次 長 茂木多喜男

社会教育課長 北川 馨

相沢幸男（社会教育課主幹・1988年10月就任）

社会教育係長 小平 実

社会教育係 東城公人、小林正衛（1988年12月就任）、林 幸彦、荻原一馬、山浦俊彦、
羽毛田卓也、田村和広

市村美咲（1988年9月退任）、五十嵐孝子（1988年10月就任、同年12月退任）

荻原香代子（1989年1月就任）、岩崎こずえ（1989年2月就任）

社会教育指導員 三石和子（1988年8月退任）

〔調査団〕

調 査 団 長 白倉盛男

調 査 副 団 長 藤沢平治

調 査 担 当 林 幸彦、羽毛田卓也

調 査 主 任 佐々木宗昭

調 査 員 井上行雄、大井今朝太

調査補助員 浅沼ノブ江、市川香里、井出百合子、宇賀神恵、遠藤しづか、大井恵美子、
片井裕子、金森治代、木島美子、堺 益子、高杉昌子、田中夏江、内藤治伸、
並木ことみ、橋詰勝子、橋詰けさよ、橋詰信子、星野良子、細萱ミスズ、
山崎平八郎、和久井義雄、渡辺久美子

参加者（順不同） 内山克己、小間沢文代、小林よしみ、浅田務、森泉秀夫、堀籠因、篠原悟、
依田みち、早川光彦、並木吉三郎、中山正二郎、多胡照子、木内一也、市川誠司、山崎明、
塩川克史、松田英明、宮川洋、高橋きくえ

3 調査日誌

○1988年8月18日

調査区域・用水路・水道管・通学用迂回路の確認と打合せを現地にて行う。

○1988年8月19日

平根小学校・保育園の通学路であるため、安全対策について十分な打合せを行う。

○1988年8月20日～

安全対策の準備を始める。(防護柵・看板・ロープ・夜間安全照明灯など)

○1988年8月23日～

調査区域内の草刈りを始める。

○1988年8月24日

最終打合せを行う。

○1988年8月31日

機材の搬入とテント設営を行う。

○1988年8月5日～

重機による表土剥ぎを行う。ダンプカーによる土砂の搬出。

○1988年9月5日～

プラン確認精査を行う。

○1988年9月8日～

堀を掘り始める。

○1988年9月28日～

土坑群の調査を開始する。

○1988年9月29日～

調査区域内二ヶ所において重機による道路切断を行い土層を確認する。

○1988年10月12日～

実測を開始する。

○1988年10月15日

航空測量・写真撮影を行う。現地説明会を行う。

○1988年10月17日～10月19日

テントの撤去と機材の搬出を行う。

○1988年10月20日～

遺物の区分・水洗・注記作業を始める。

○1988年12月～

遺物の復原・実測作業を始める。

○1989年1月～

図面修正・トレース作業を始める。

○1989年2月～3月

遺物の写真撮影・原稿の執筆・編集作業を行う。

4 発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたり、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

1 調査はグリッド方式で行う。

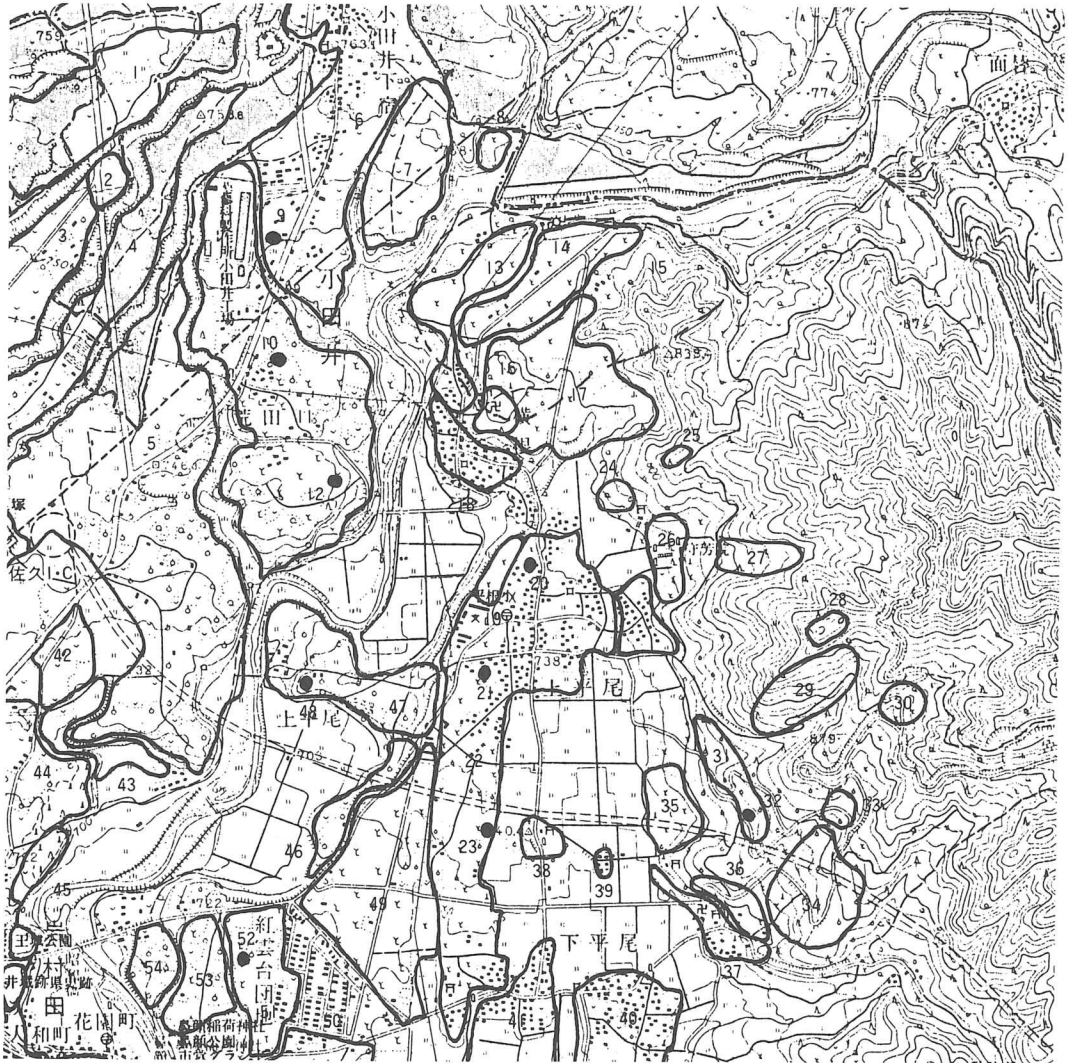
調査区全体を5 m×5 mの方眼に組み、南北ラインを数列（北より1・2・3……）とし、東西ラインは東からあ・い・う……の順で番号をつけ、各グリッドの北東交点をそのグリッド名とした。

2 土坑は2分割して調査を行った。

3 堀は原則として全調査を行った。

4 土層は、『新版 標準土色帖』で土色を決定し、粘性と含有物を観察した。

第II章 遺跡の環境



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

白岩城跡（里古城）は、東に平尾富士を臨み、西は湯川を見降ろす、河岸段丘の断崖上に位置する。この断崖の比高差は37.2mを測る。現在、断崖下より湯川までの河岸段丘上には水田が営まれている。なお、湯川より断崖下までは250mを測る。また断崖を登りきった白岩城より東方の守芳院に向けて緩かに高度を下げ、500m離れた平尾城（山古城）に向かって急勾配をなす。この平尾城と白岩城との比高差は205.1mを測る。

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

No.	遺跡名	時代						備考
		縄	弥	古	奈	平	中	
1	曾根城遺跡	○	○	○	○	○		
2	曾根城跡						○	
3	芝宮遺跡群	○	○	○	○	○		芝宮遺跡1・2・3(54・55・57)、下芝宮遺跡(62・63)他
4	長土呂遺跡群	○	○	○	○	○	○	上大林・下聖端・上聖端遺跡(63)
5	栗毛坂遺跡群		○	○	○	○		柳田遺跡(58)、中曾根遺跡(62)
6	中金井遺跡群		○	○	○	○	○	荒田・上金井遺跡(63)
7	金井城跡						○	金井城跡(63～)
8	唄坂遺跡	○	○	○	○	○		
9	皎月古墳			○				皎月古墳(45)
10	島原古墳			○				
11	跡坂遺跡群		○	○	○	○		
12	からむし古墳			○				
13	芋の原遺跡群	○	○	○	○	○		
14	上長坂遺跡群	○	○	○	○	○		
15	横根古墳群			○				
16	延寿城跡						○	
17	上の原遺跡群	○	○	○	○	○		
18	延寿城遺跡群					○		
19	白岩城跡						○	今回調査
20	宿古墳			○				
21	塚畑古墳			○				
22	東大久保遺跡群	○	○	○	○	○		
23	宮の西古墳			○				
24	矢口古墳群			○				

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

No.	遺跡名	時代						備考
		縄	弥	古	奈	平	中	
25	平古墳群			○				平2号古墳(60)
26	矢沢遺跡					○		
27	矢沢古墳群			○				
28	平尾城						○	
29	城古墳群			○				
30	下伴助B遺跡					○		
31	橋ヶ窪遺跡					○		
32	一本松古墳			○				
33	下伴助A遺跡					○		
34	丸山古墳群			○				
35	北山寺遺跡					○		北山寺遺跡(63)
36	万助久保遺跡					○		
37	木田橋遺跡					○		
38	宮前遺跡					○		
39	宮前遺跡					○		
40	東村遺跡群	○	○	○	○	○		
41	戸屋敷遺跡群					○		
42	西赤座遺跡		○	○	○	○		
43	上岩子遺跡					○		
44	岩村田遺跡群		○	○	○	○	○	六供後遺跡(55)、新町遺跡(60.61.62)、菅田遺跡(59.62)
45	石並城跡		○	○	○	○	○	
46	腰巻遺跡		○	○	○	○		腰巻遺跡(62)
47	潰石遺跡		○	○	○	○		高内遺跡(63)
48	潰石古墳			○				

第3表 周辺遺跡一覧表(3)

No.	遺 跡 名	時 代						備 考
		縄	弥	古	奈	平	中	
49	西大久保遺跡群	○	○	○	○	○		西大久保遺跡 (61)
50	蛇塚A遺跡群					○		
51	棧敷遺跡					○		
52	棧敷古墳			○				
53	上小平遺跡					○		
54	下小平遺跡		○	○	○	○		

本遺跡付近には、曾根城遺跡(1)、曾根城跡(2)、1979年・1980年・1982年度調査の芝宮遺跡と1987年・1988年度調査の下芝宮遺跡、1988年度調査の南上中原・南下中原遺跡有する芝宮遺跡群(3)、1988年度調査の上大林遺跡・下聖端遺跡・上聖端遺跡有する長土呂遺跡群(4)、1983年度調査の柳田遺跡と1987年度調査の中曾根遺跡有する栗毛坂遺跡群(5)、1988年度調査の荒田・上金井遺跡有する中金井遺跡群(6)、1988年度調査の金井城跡(7)、唄坂遺跡(8)、1970年度調査の皎月古墳(9)、島原古墳(10)、跡坂遺跡群(11)、からむし古墳(12)、芋の原遺跡群(13)、上長坂遺跡群(14)、28基の古墳を有する横根古墳群(15)、延寿城跡(16)、上の原遺跡群(17)、延寿城遺跡群(18)、今回調査の白岩城跡(19)、宿古墳(20)、塚畑古墳(21)、東大久保遺跡群(22)、宮の西古墳(23)、3基の古墳を有する矢口古墳群(24)、1985年度調査の平2号古墳を有する平古墳(25)、矢沢遺跡(26)、矢沢古墳群(27)、白岩城と一対の城である平尾城(28)、6基の古墳を有する城古墳群(29)、下伴助B遺跡(30)、1988年度調査の橋ヶ窪遺跡(31)、一本松古墳(32)、下伴助A遺跡(33)、丸山古墳群(34)、1988年度一部調査の北山寺遺跡(35)、万助久保遺跡(36)、木田橋遺跡(37)、宮前遺跡(38・39)、東村遺跡群(40)、戸屋敷遺跡群(41)、西赤座遺跡(42)、上岩子遺跡(43)、1980年度調査の六供後遺跡と1985年～1987年度調査の新町遺跡、1984年・1987年度調査の菅田遺跡を有する岩村田遺跡(44)、1986年度確認調査を行った石並城跡(45)、1987年一部調査の腰巻遺跡(46)、1988年度調査の高内遺跡有する潰石遺跡(47)、潰石古墳(48)、1986年度調査の西大久保遺跡を有する西大久保遺跡群(49)、蛇塚A遺跡群(50)、棧敷遺跡(51)、棧敷古墳(52)、上小平遺跡(53)、1981年度調査の下小平遺跡(54)などが存在する。

上記遺跡中中世の城館跡は、現在なお発掘調査が進行中の金井城、小笠原氏の館跡と推定されている延寿城、曾根城、大井城などである。また平2号古墳(25)は調査の結果、古墳ではなく

註1

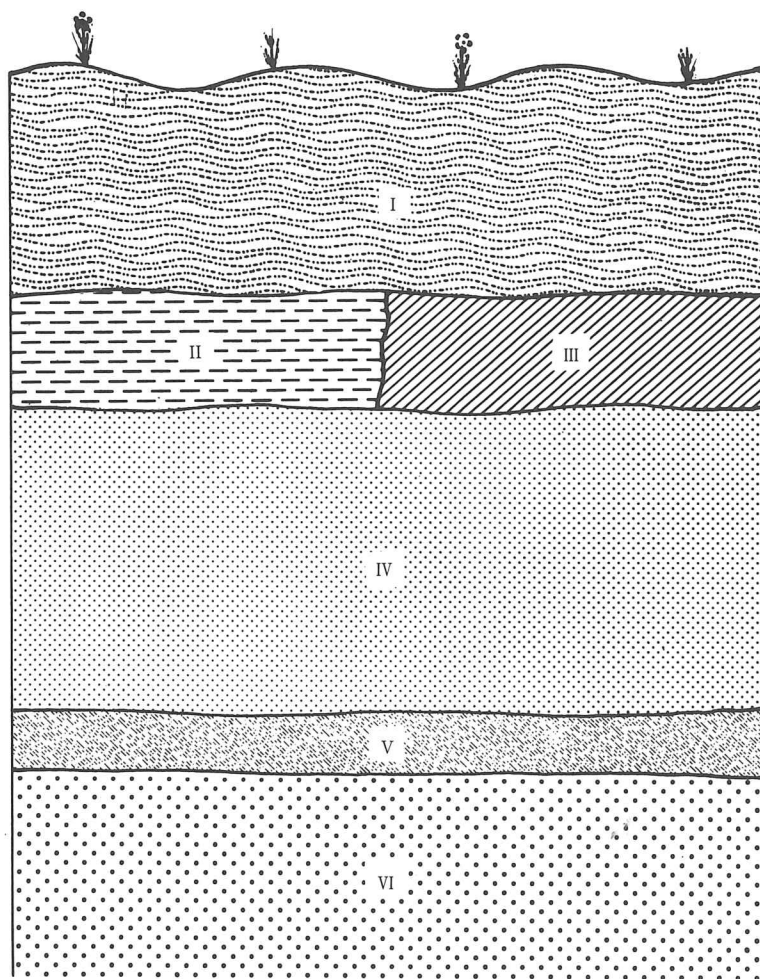
註2

烽火台であることが明らかになった。

註1 主郭より扇状に郭が配列する平山城である。

註2 黒岩城・王城・石並城からなる。佐久市教育委員会1986『大井城跡』（黒岩城）
同1984『大井城』大井城関係文献史料集 同1987『大井城跡』（黒岩・王・石並城）

第Ⅲ章 層 序



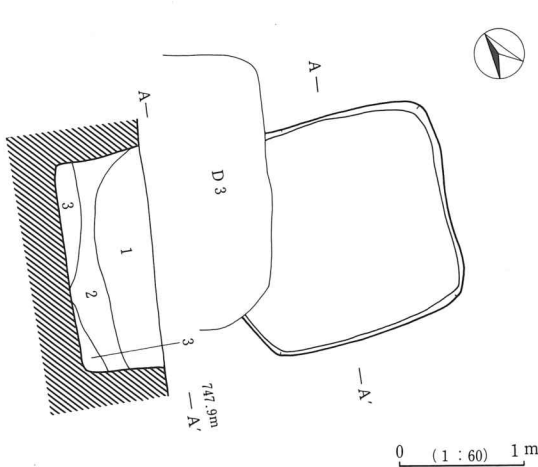
第3図 層序模式図

白岩城跡の基本層序は、調査区南側の東側面と重機切断面において実測した。

第Ⅰ層は、耕作による影響下で成立した黒褐色土、第Ⅱ層は、スコリアとパミス小粒を微量含む黒褐色土、第Ⅲ層は、パミス小粒～極小粒とローム粒子を少量含む褐色土、第Ⅳ層は、パミス極大粒をやや多く含む明黄褐色土(ローム)、第Ⅴ層は、パミス小粒を少量と砂粒を微量含むにぶい橙色土(ローム)、第Ⅵ層は、パミス極大粒を多量に、スコリアを少量含むにぶい褐色土(ローム)である。

第IV章 遺構と遺物

1 土 坑



- 1 暗褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を微量含む。
- 3 暗褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。

第4図 D1号土坑実測図

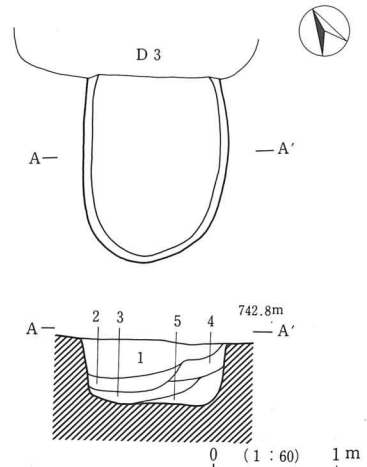
1) D1号土坑

D1号土坑は、調査区北側のうー3グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。なおD3号土坑に西壁を破壊される。

規模は、東西が推定で180cm、南北が177cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。

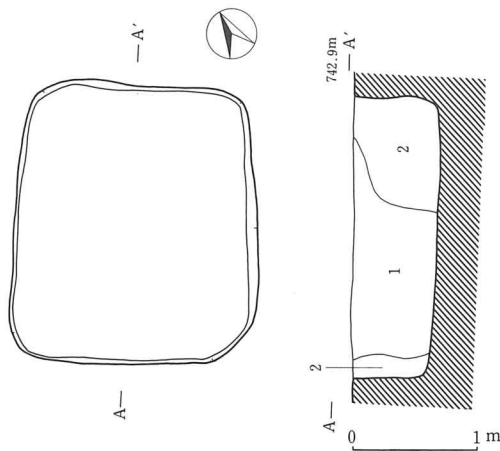
覆土は3層に分割された。第1層は、パミスとスコリア・ローム粒子を少量含む暗褐色土、第2層は、パミスとスコリア・ローム粒子を微量含む黒褐色土、第3層は、パミスとスコリアを微量、ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

床面は平坦で硬くしまっていた。なお壁残高は62.5cm~70cmを測る。



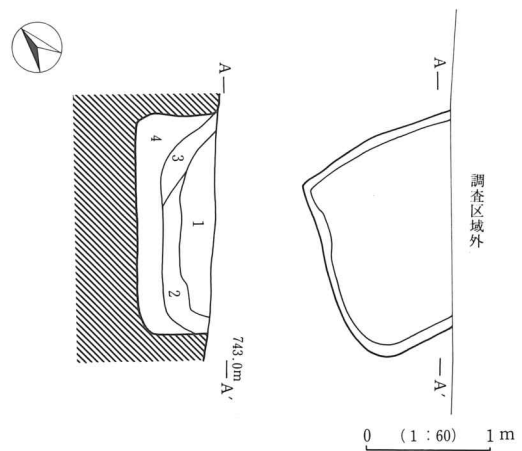
- 1 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を微量含む。
- 2 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。
- 3 黒色土層 粘性やや弱し。パミス・ローム粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・ローム粒子を少量含む。
- 5 暗褐色土層 粘性弱し。パミスを微量、ローム粒子を少量含む。

第5図 D2号土坑実測図



- 1 暗褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。

第6図 D3号土坑実測図



- 1 暗褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。
- 3 暗褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス・スコリア・ローム粒子を微量含む。

第7図 D4号土坑実測図

遺物は出土せず、所産期は不明である。

2) D2号土坑

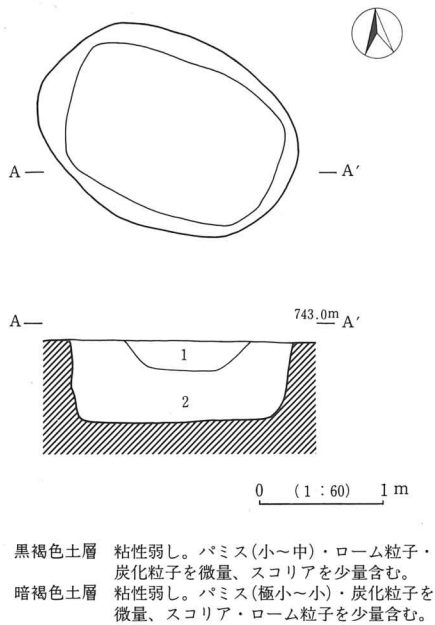
D2号土坑は、調査区北側の、う・えー3・4グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。なおD3号土坑に北側を破壊される。

規模は、南北が推定で180cm、東西が116cmを測り、平面形態は、南北に長い楕円形を呈する。長軸方位はN-30°-Eを指す。

覆土は5層に分割された。第1層は、パミスとスコリア・ローム粒子を微量含む黒褐色土、第2層は、パミスとスコリアを微量、ローム粒子を少量含む黒褐色土、第3層はパミスを微量含む黒色土、第4層は、パミスとローム粒子を微量含む黒褐色土、第5層は、パミスを微量、ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

床面は平坦で硬くしまっていた。なお壁残高は42cm~49cmを測る。

遺物は出土せず、所産期は不明である。



第8図 D5号土坑実測図

3) D3号土坑

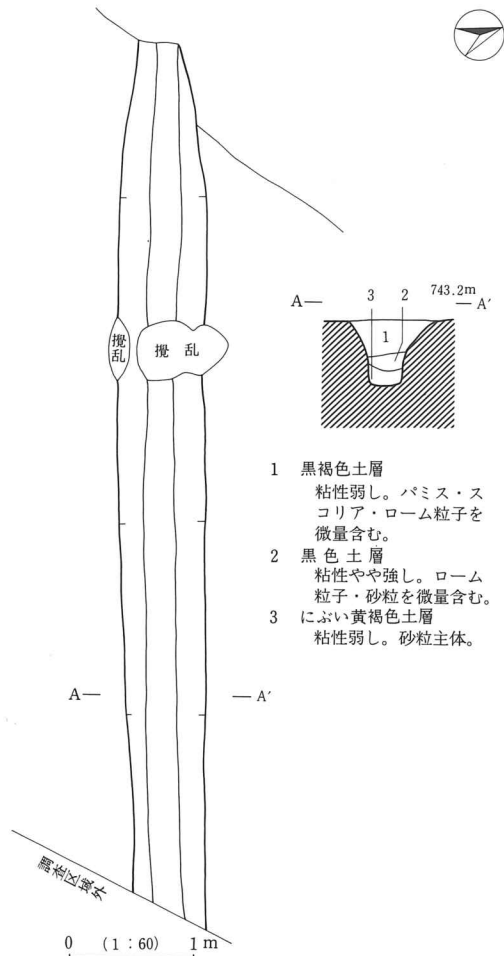
D3号土坑は、調査区北側の、う・えー3グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。なおD1号・D2号土坑を破壊する。

規模は、南北が222cmで東西が194cmを測り、平面形態は、南北に長い隅丸長方形を呈する。なお長軸方位はN-30°-Eを指す。

覆土は2層に分割された。第1層は、パミスとスコリア・ローム粒子を少量含む暗褐色土、第2層は、パミスとスコリア・ローム粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土である。

床面は平坦で硬くしまっていた。なお壁残高は、60cm～69.5cmを測る。

遺物は出土せず、所産期は不明である。



第9図 M1号溝状遺構実測図

4) D4号土坑

D4号土坑は、調査区北側の、いー2・3グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。なお東側半分は調査区域外である。

規模は、南北が129cm（確認最大値）で東西が163cmを測り、平面形態は、床面の状態等より隅丸方形を呈すると考えられる。なお南北軸方位はN-18°-Eを指す。

覆土は4層に分割された。第1層は、パミス・スコリア・ローム粒子を少量含む暗褐色土、第2層は、パミスとスコリア・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む黒褐色土、第3層はパミスとスコリア・ローム粒子を少量含む暗褐色土、第4層は、パミスとスコリア・ローム粒子を微量含む黒褐色土である。

床面はおおむね平坦でしまっていた。なお壁残高は、53cm~67cmを測る。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

5) D5号土坑

D5号土坑は、調査区北側の、い・うー2・3グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において単独で検出された。

規模は、南北が153cmで東西212cmを測り、平面形態は、床面が東西に長い隅丸長方形、上端が楕円形を呈する。なお長軸方位はN-63°-Wを指す。

覆土は2層に分割された。第1層は、パミスとローム粒子・炭化粒子を微量、スコリアを少量含む黒褐色土、第2層は、パミスと炭化粒子を微量、スコリアとローム粒子を少量含む暗褐色土である。

床面は平坦で硬くしまっていた。なお壁残高は、59cm~65cmを測る。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

2 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

M1号溝状遺構は、調査区北側の、あ・いー1グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。また一部を攪乱によって破壊される。

規模は、長さ691cm（確認値）で最大幅71cmを測り、東より西に向かってレベルを低下させる。なお、勾配率は2%である。

覆土は3層に分割された。第1層は、パミスとスコリア・ローム粒子を微量含む黒褐色土、第2層は、ローム粒子と砂粒を微量に含む黒色土、第3層は、砂粒主体のにぶい黄褐色土層である。

床面・壁面ともに平滑だが、水の流れた痕跡が認められる。また形態が直線的で、ほぼ同一巾である事から人為的に掘られた溝と推定される。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

3 堀・土塁

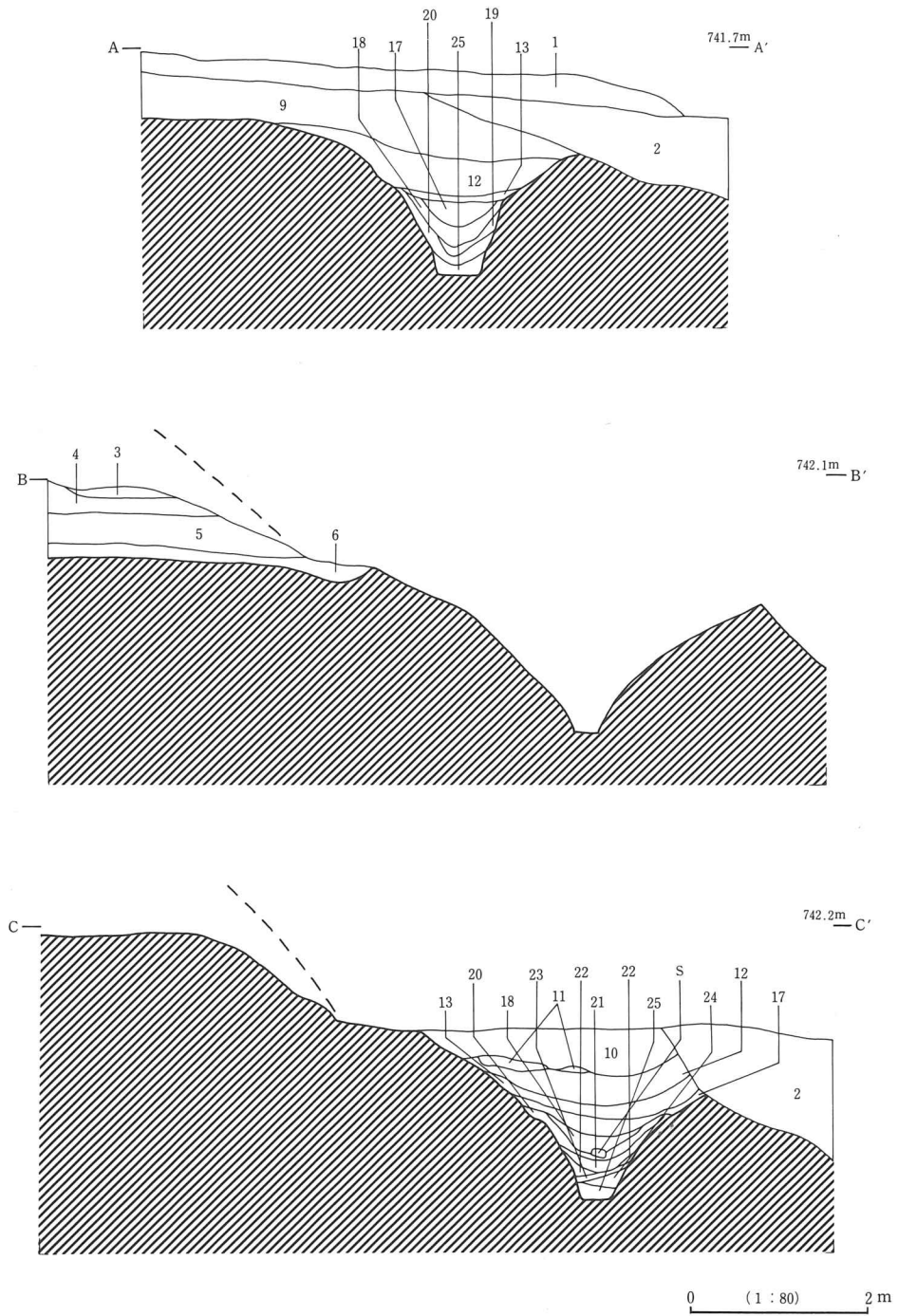
堀と土塁については第10図～第13図を参照されたい。

土塁は、主郭（本館）の東側において確認された。なお調査区外である北側と南側にも土塁が巡ると考えられる。また東側の堀の途切れる部分（門跡）を中心に石塁が確認された。さらに、この石塁に使用されたと思われる石が、堀の覆土より数多く出土している。土塁の覆土は4層に分割された。第3層の粘性が弱く、パミスとスコリアを微量含む黒褐色土、第4層の粘性が弱くパミスとスコリアを微量含む黒褐色土、第5層の粘性がやや弱く、パミスとスコリアを微量含む黒色土、第6層の粘性がやや弱く、ローム粒子を少量とパミス・スコリアを微量含む黒褐色土である。また第6層の表出面は非常に堅く、犬走りの使用面と考えられる。第3層～第5層は、主郭造築時に平らにならすために運ばれた土と考えられる。また土塁は、土層・堀覆土・石塁の出土状況より現在よりかなり高かったと想定される。なお堀を掘り込んだ土砂は一部の土塁上面において観察されたのみで、土砂の搬出場所は今回の調査では確認されなかった。

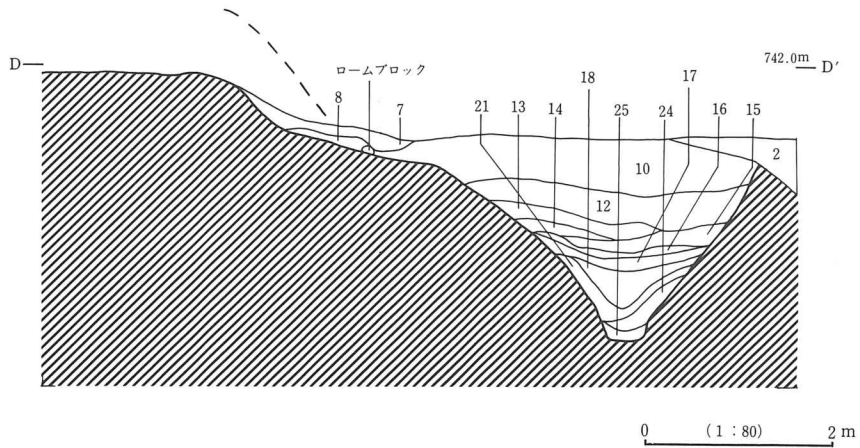
土塁に関する計測値は以下のとおりである。東側全長82.5m、検出面より犬走りまでの比高差57cm～107.5cm、検出面より堀床面までの比高差252cm～298cmを測る。なお遺物は第34図中の縄文時代後期の土器片を除いては全く出土しなかった。なお縄文土器は土塁の覆土中より出土した。

（第3層・第4層）

堀は、主郭（本館）の東側、北と南側の一部、二郭（副館・脇館）の東側において確認された。堀は当初、現道の下及び東側であろうと予想されていたが、それは調査区北側の一部だけで、主郭部分では、東側を安原用水建設時に破壊されるが、ほぼ全面が確認された。また主郭東側の堀の中央部は長さ348cmに渡って途切れる。この部分は主郭との位置関係等より門の跡（主郭入口跡）と考えられる。なお堀の覆土については、第11図～第13図を参照されたい。A・C・Dセクション第19層と第20層・第21層、E～Gセクション第12層と第13層・第14層中で焼土が確認された。なおこの焼土は、床面からの高さという点で、直接戦災とは結び付かないが、遺物の出土層（A・C・Dセクション第15層・第17層以下、E～Gセクション第10層以下）との関連より、本城跡が廃棄された時期と時間差が無いように考えられる。



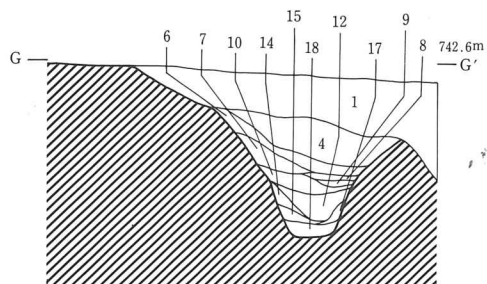
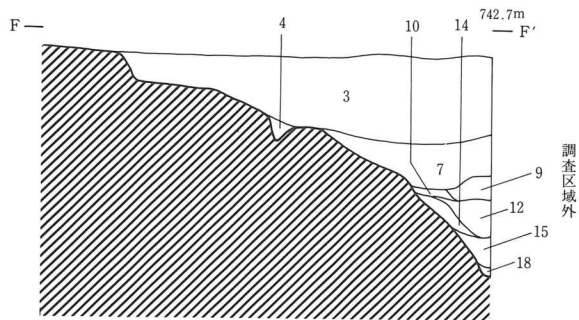
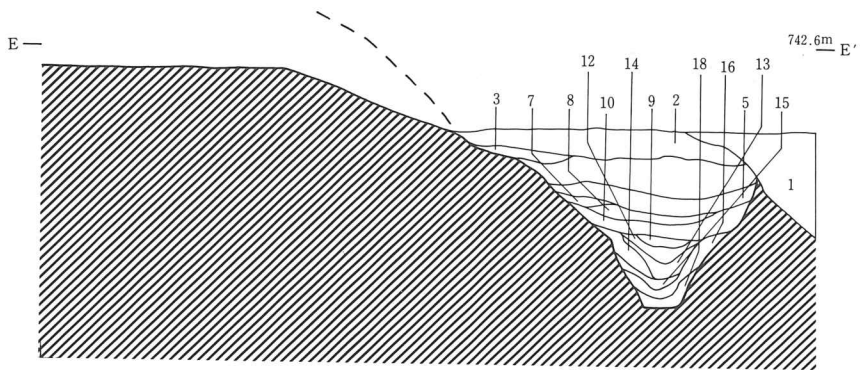
第11图 壩・土壘実測図



A-Dセクション土層説明

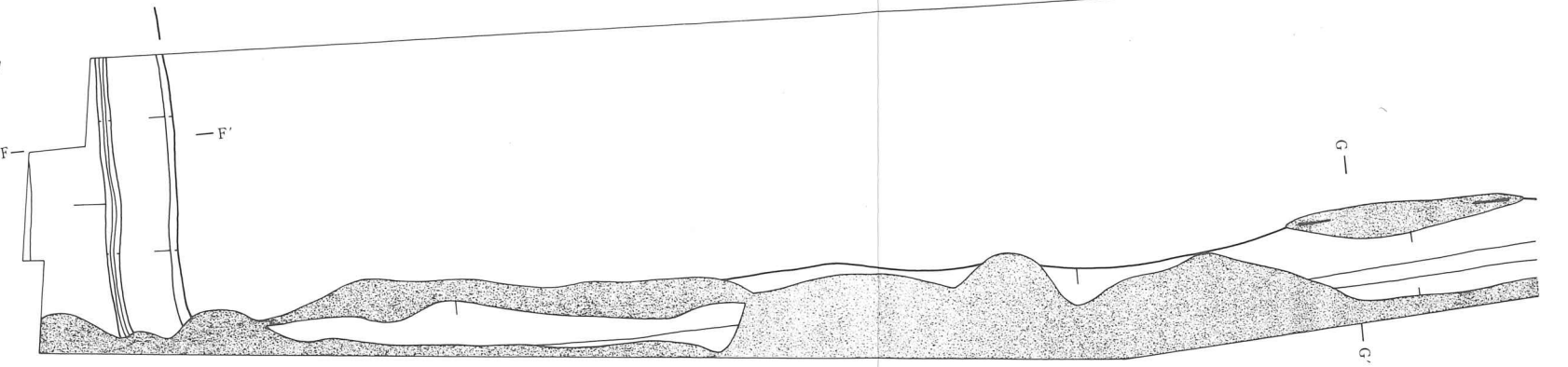
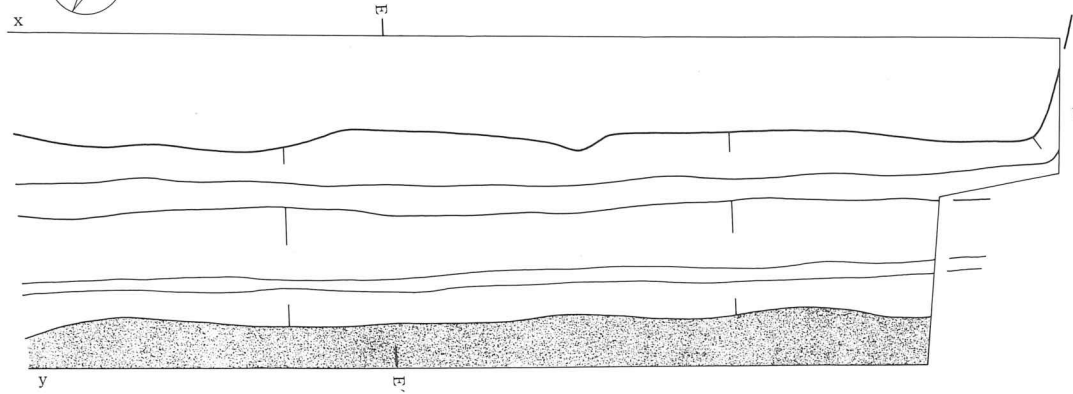
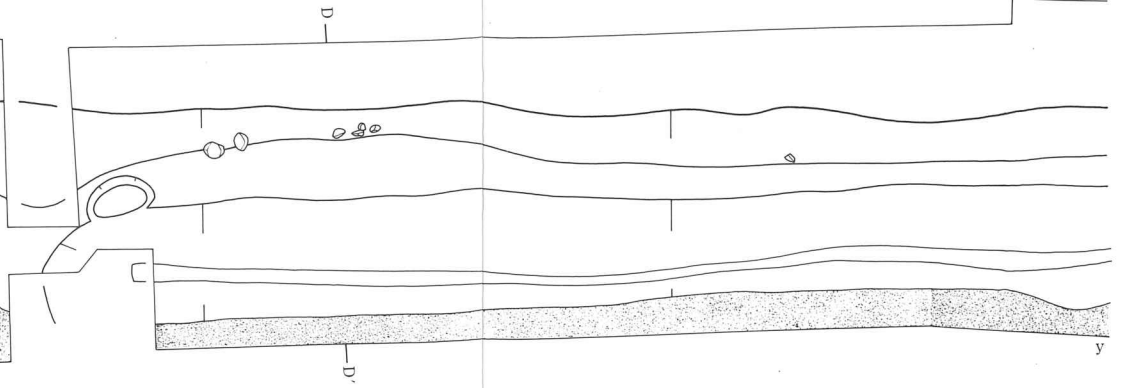
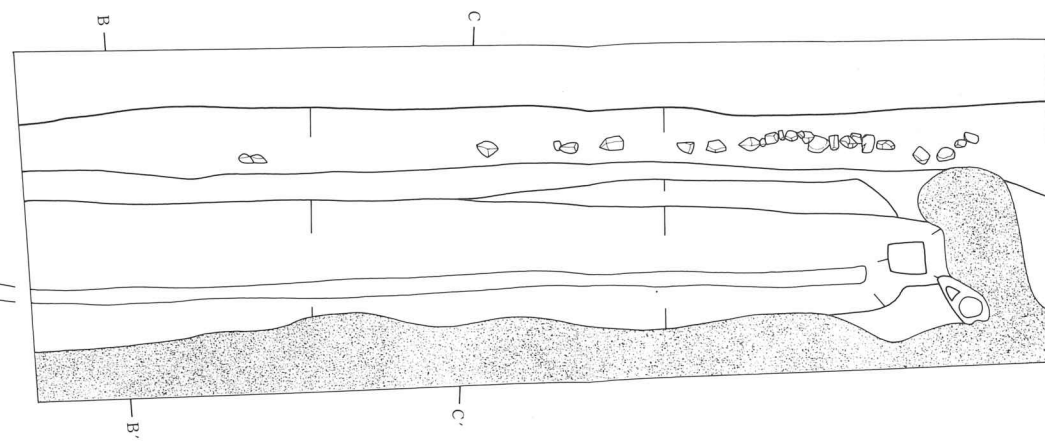
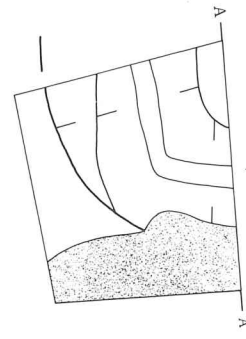
- 1 耕作土
- 2 安原用水路建設による攪乱
- 3 黒褐色土層 粘性弱し。バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。
- 4 黒褐色土層 粘性弱し。バミス（中～小粒）・スコリア（極小～小粒）を微量含む。
- 5 黒色土層 粘性やや弱し。バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。
- 6 黒褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を少量、バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。
- 7 黒褐色土層 粘性弱し。砂礫・バミス（極小～中粒）を少量含む。（土塁の崩落土）
- 8 黒褐色土層 粘性弱し。バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。（土塁の崩落土）
- 9 黒色土層 粘性弱し。バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。（土塁の崩落土）
- 10 黒褐色土層 粘性弱し。バミス・スコリア（極小～小粒）を微量含む。（土塁の崩落土か）
- 11 黒褐色土層 粘性弱し。バミス（小～中粒）と砂礫を少量含む。
- 12 黒褐色土層 粘性弱し。バミス（小～中粒）を砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 13 褐色土層 粘性弱し。砂礫・ローム粒子を多量に含む。
- 14 暗褐色土層 粘性弱し。砂礫・小礫・ローム粒子を多量に含む。
- 15 黒褐色土層 粘性弱し。砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 16 極暗褐色土層 粘性弱し。バミス（極小～中粒）・砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 17 にぶい褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、バミス（極小～中粒）・砂礫を少量含む。
- 18 黒褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子・砂礫を微量含む。
- 19 褐色土層 粘性弱し。ローム粒子・バミス極大以下・スコリア小粒を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。
- 20 にぶい黄橙色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を多量に、バミス中粒・スコリア小粒を少量、焼土ブロック・炭化粒子を微量。
- 21 にぶい褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、バミス（小～中粒）・砂礫・焼土粒子を少量含む。
- 22 にぶい褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、バミス（小～中粒）を少量含む。
- 23 にぶい橙色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、バミス（極小～中粒）を少量含む。（壁崩落土）
- 24 灰褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、バミス（極小～中粒）を少量含む。（壁崩落土）
- 25 褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子を多量に、バミス（極小～中粒）を少量含む。

第12図 堀・土塁実測図



0 (1 : 80) 2 m

第13図(1) 堀・土墨実測図



攪乱

0 (1:200) 10m

第10図 堀・土塁実測図

E～Gセクション土層説明

- 1 安原用水建設時の攪乱
- 2 黒褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～極大粒）・砂礫を少量、ローム粒子を微量含む。
- 3 黒褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～極大粒）を多量に、砂礫・ローム粒子を微量含む。
- 4 暗褐色土層 粘性弱し。パミス（小～中粒）・砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 5 褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～大粒）・砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 6 黒褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを少量含む。
- 7 暗褐色土層 粘性弱し。パミス・砂礫・ローム粒子を少量含む。
- 8 黒褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～小粒）・スコリアを少量含む。
- 9 にぶい黄橙色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、パミス・スコリアを少量含む。
- 10 暗褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。
- 11 にぶい橙色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子を多量含む。
- 12 黒褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。
- 13 にぶい褐色土層 粘性弱し。パミス・スコリアを微量、ローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。
- 14 褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～小）・スコリアを微量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
- 15 黄褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～小）・スコリアを微量、ローム粒子を多量に含む。
- 16 にぶい褐色土層 粘性やや弱し。パミス（極小～小）・スコリアを微量、ローム粒子を多量に含む。
- 17 灰黄褐色土層 粘性弱し。パミス（極小～中）を微量、ローム粒子を多量に含む。
- 18 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミス（極小～中）・砂粒を少量、ローム粒子を微量含む。

第13図(2) 堀土層断面図

堀に関する計測値は以下のとおりである。主郭東側全長（低面検出長）77.5mで推定長81m、主郭南側検出長2.75m、主郭北側検出長3.1m、底面幅22.4cm～51cm、床面より犬走りまでの比高差155cm～201cm、二郭東側全長（調査区内推定長）134.4m、底面幅36cm～54cm、深さ178cm163.5cmを測る。なお底面はフラットで、壁面に比べかなり堅くしまっており、空堀通路が想定される。

遺物は、台石（敲台を含む）・砥石・凹石・播鉢・五輪（空風部・火輪部）・石櫃・敲石・擦石・多目的石器・紡錘車・石臼・硯・打製石斧・鉾滓・石製円板・角釘・小柄・古銭・土製円板・羽口・土師質土器・須恵質土器・手焙り鉢・中世陶器・瓦・縄文土器等が出土した。

台石（14—7、16—16～18、17—19～27、25—115～118、26—119～127、27—128～135、28—136～143）は43点が出土した。これらの中には、柱を支える礎石や石畳の構築材が含まれると考えられるが、判断不可能のため敲台とわかるもののみ明記した。

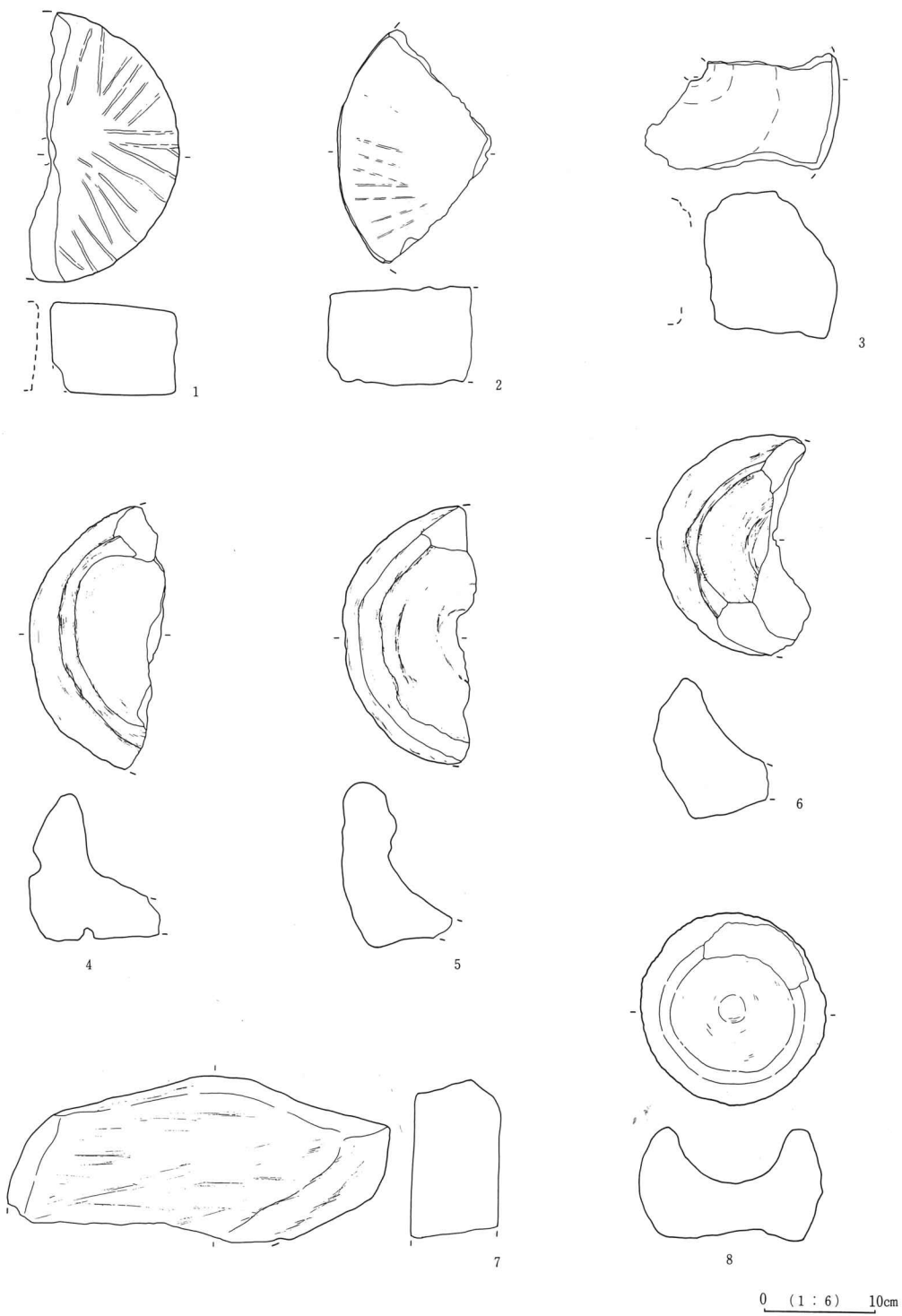
石臼（14—1～3、16—15、18—32～36）は9点が出土した。1～3・15はT臼で、32～36は上臼である。なお何れも破片である。石質は全て安山岩で、大井城跡（黒岩城）で多く出土した多孔質・玻璃質・細粒安山岩が認められない。

播鉢（14—4～6・8、15—9～11、18—30・31）は9点が出土した。何れも石臼より軟質の安山岩が使用されている。何れも破片で、成形はノミによって丁寧に仕上げられる。なお底部はほとんどが平らである。

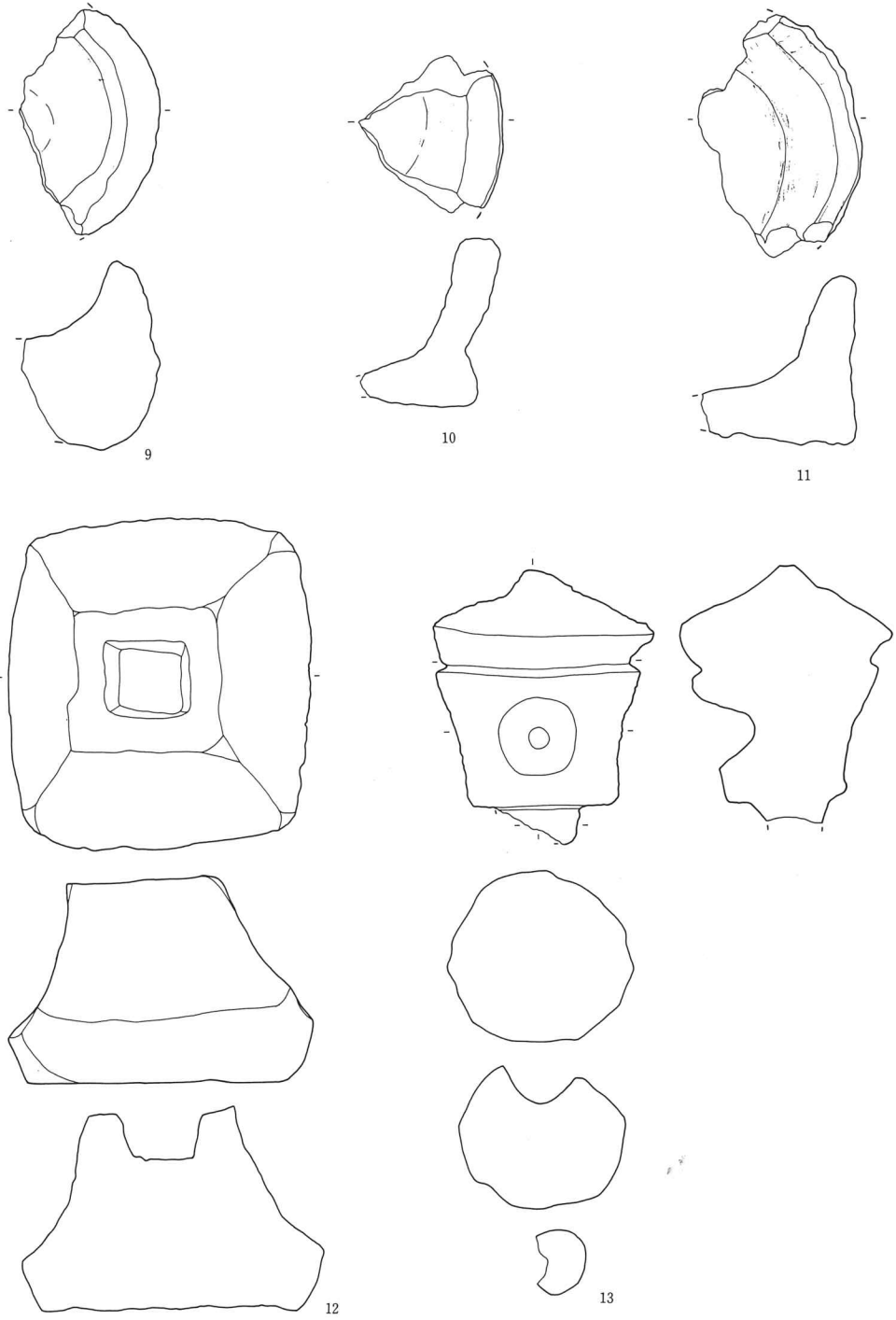
五輪（15—12・13）は2点が出土している。12は火輪部で、頂部に穴が穿たれる。13は空風輪部で、側面中央に穴が穿たれる。

石櫃（15—14）は1点のみ出土している。上部を欠いているが、凹み部は残存している。また側面の二ヶ所に梵字が刻まれるが、当初は四面全てに刻まれていたと考えられる。なお現存する二文字については、判読できなかった。

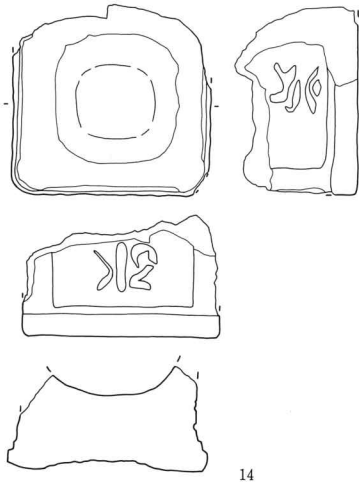
砥石（19—38～46、20—47～54・56、21—57～68、22—69～79、31—161～164）は45点が出土



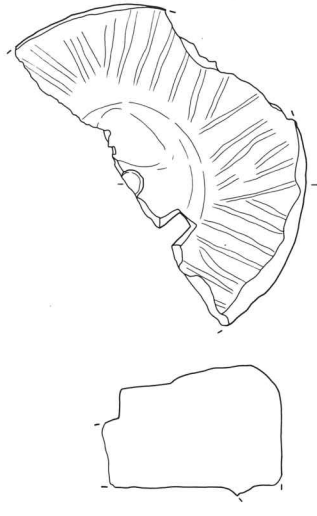
第14图 掘出土遺物実測図(1)



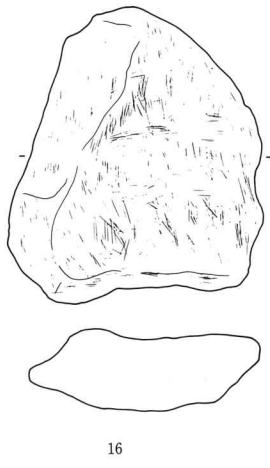
第15図 堀出土遺物実測図(2)



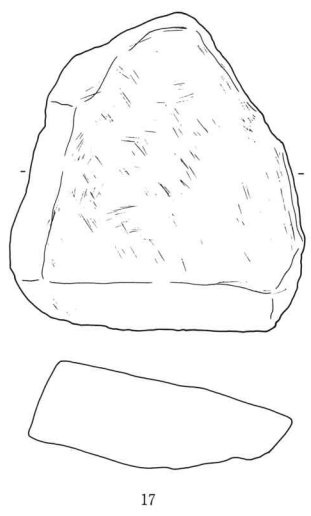
14



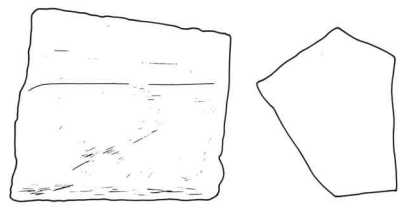
15



16



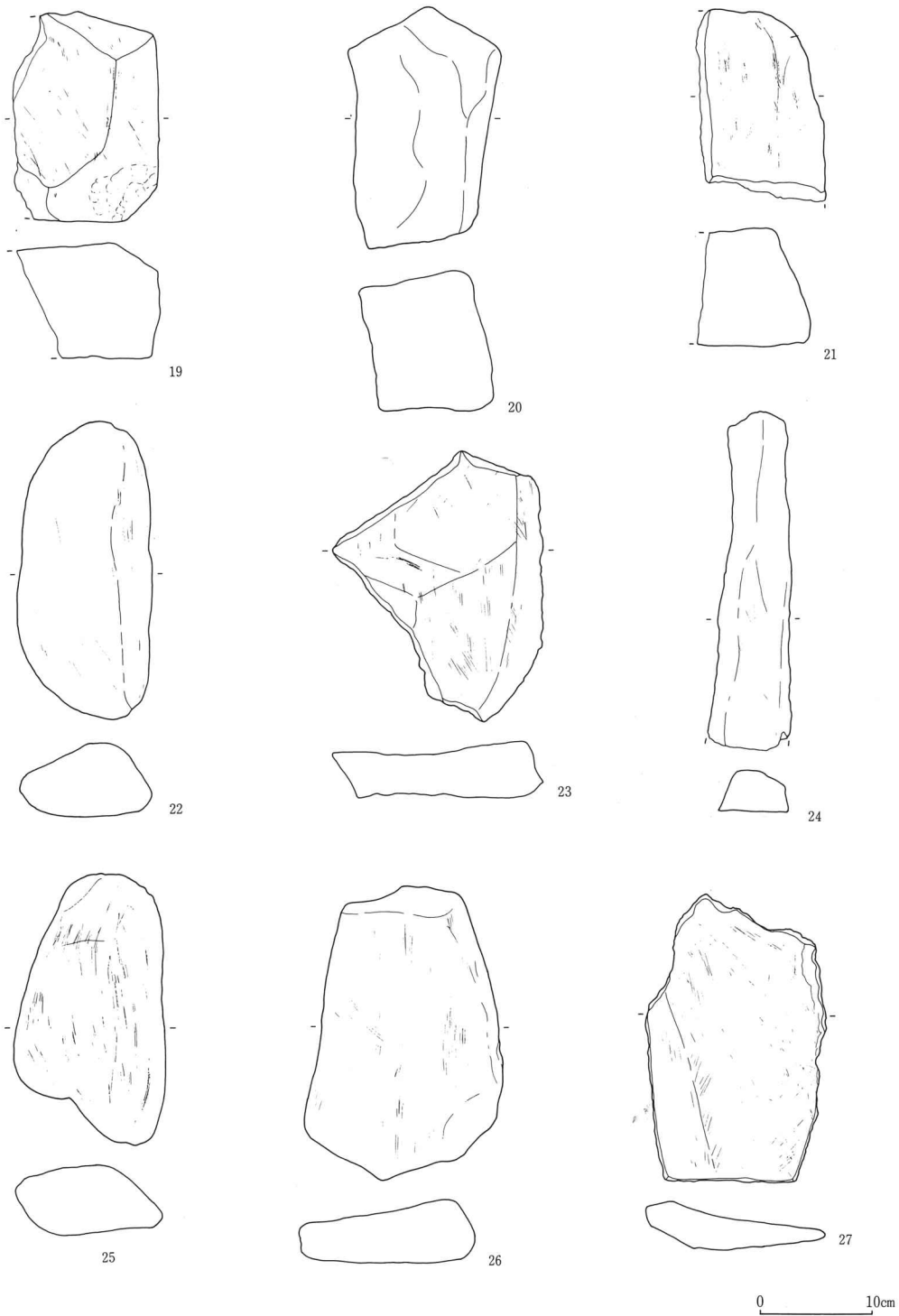
17



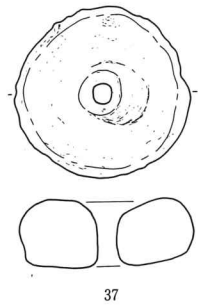
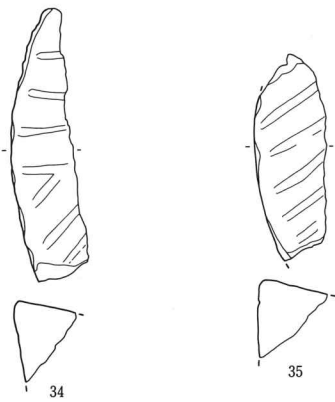
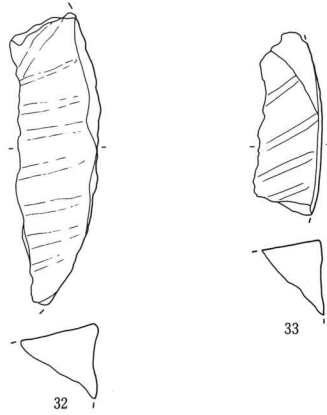
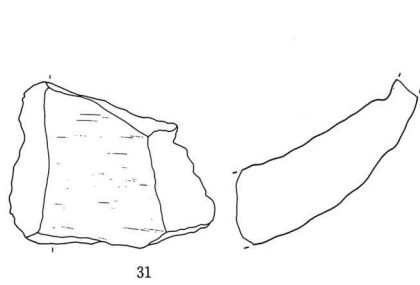
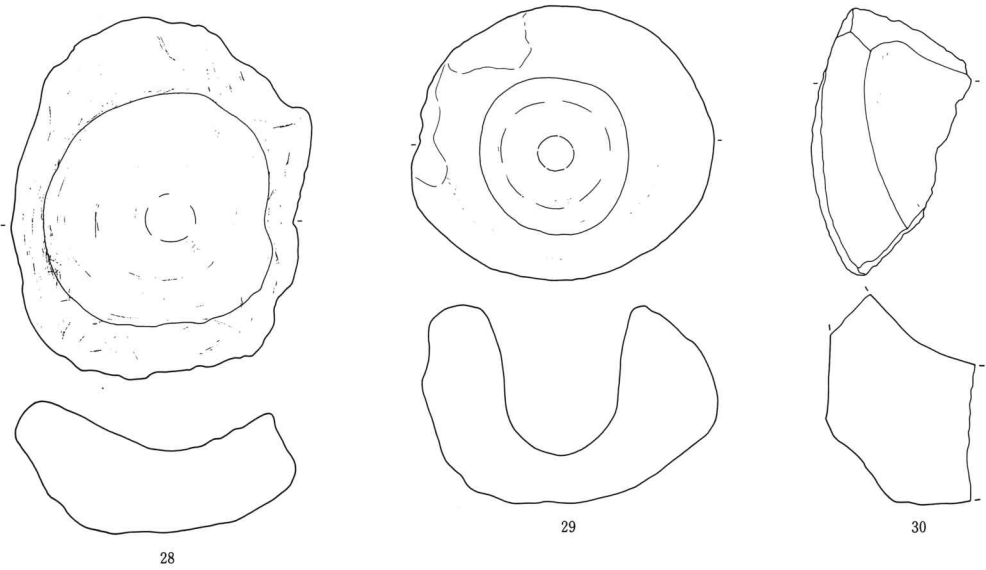
18

0 (1 : 6) 10cm

第16图 掘出土遺物実測図(3)



第17図 堀出土遺物実測図(4)

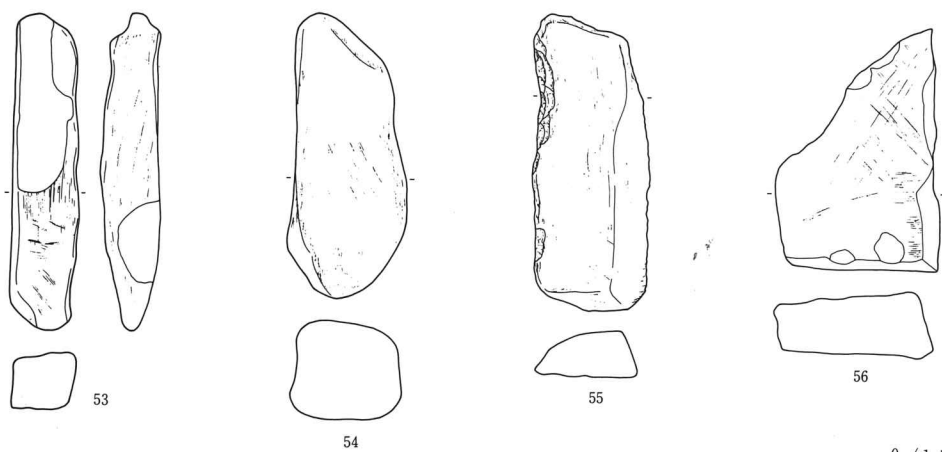
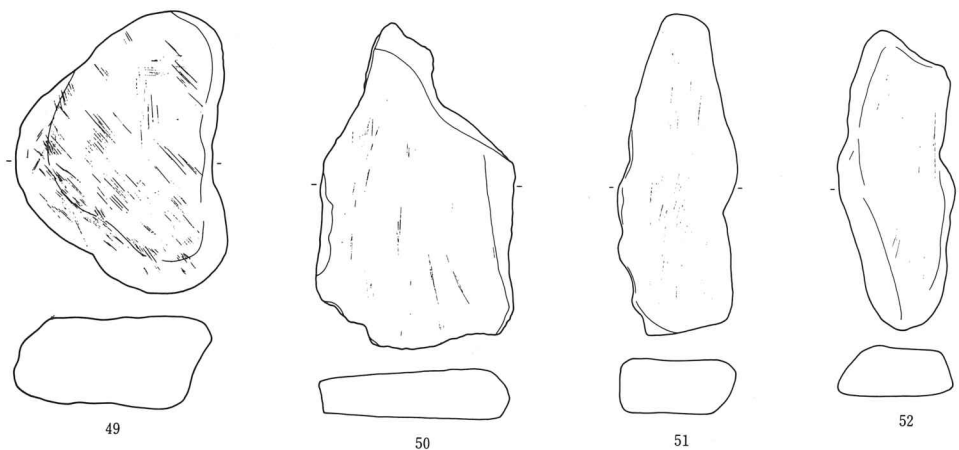
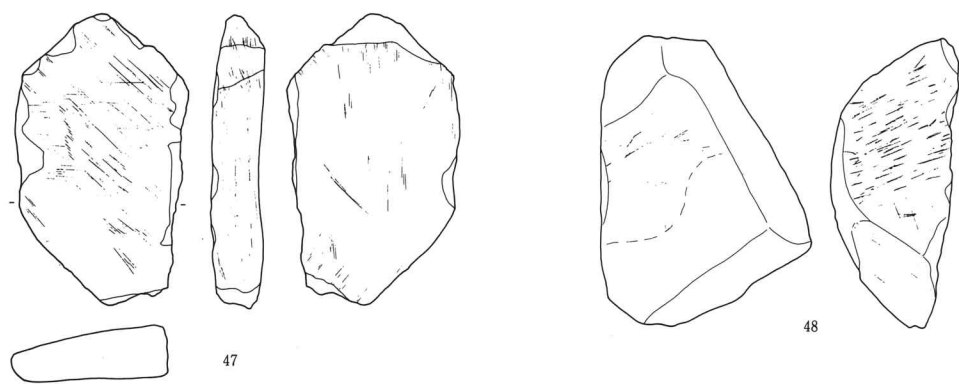


0 (1 : 4) 5 cm

第18图 堀出土遺物実測図(5)

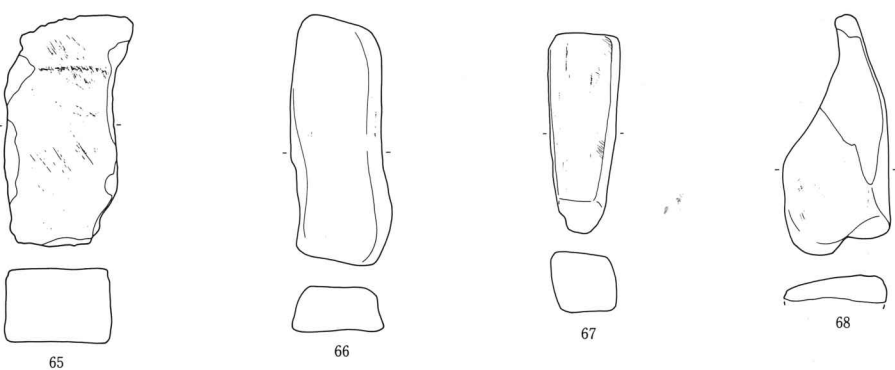
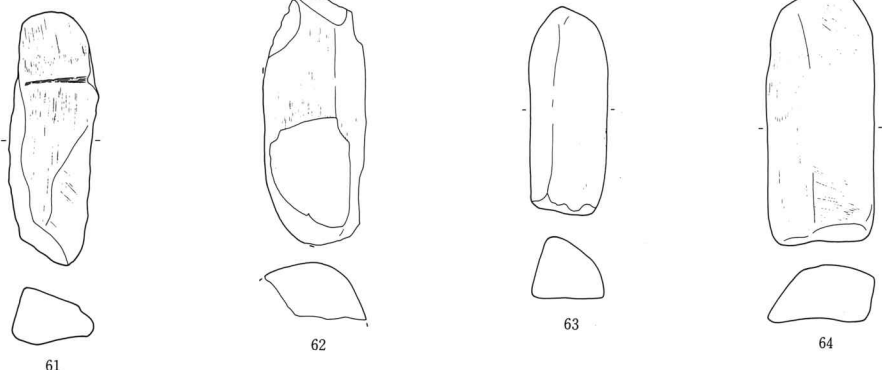
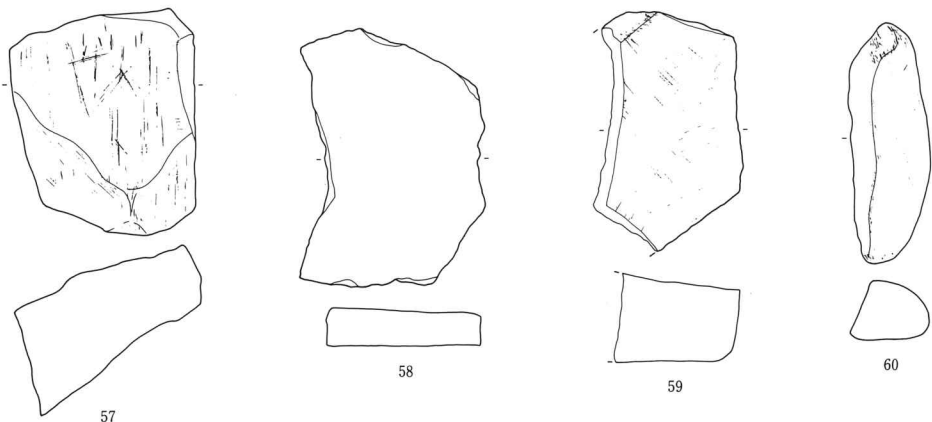


第19図 堀出土遺物実測図(6)



0 (1 : 4) 5 cm

第20图 堀出土遺物実測図(7)

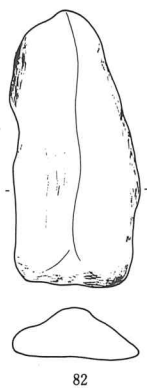


0 (1 : 4) 5 cm

第21图 堀出土遺物実測図(8)



第22図 堀出土遺物実測図(9)



82



83



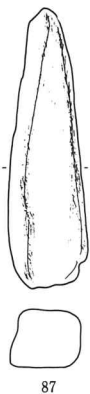
84



85



86



87



88



89



90



91



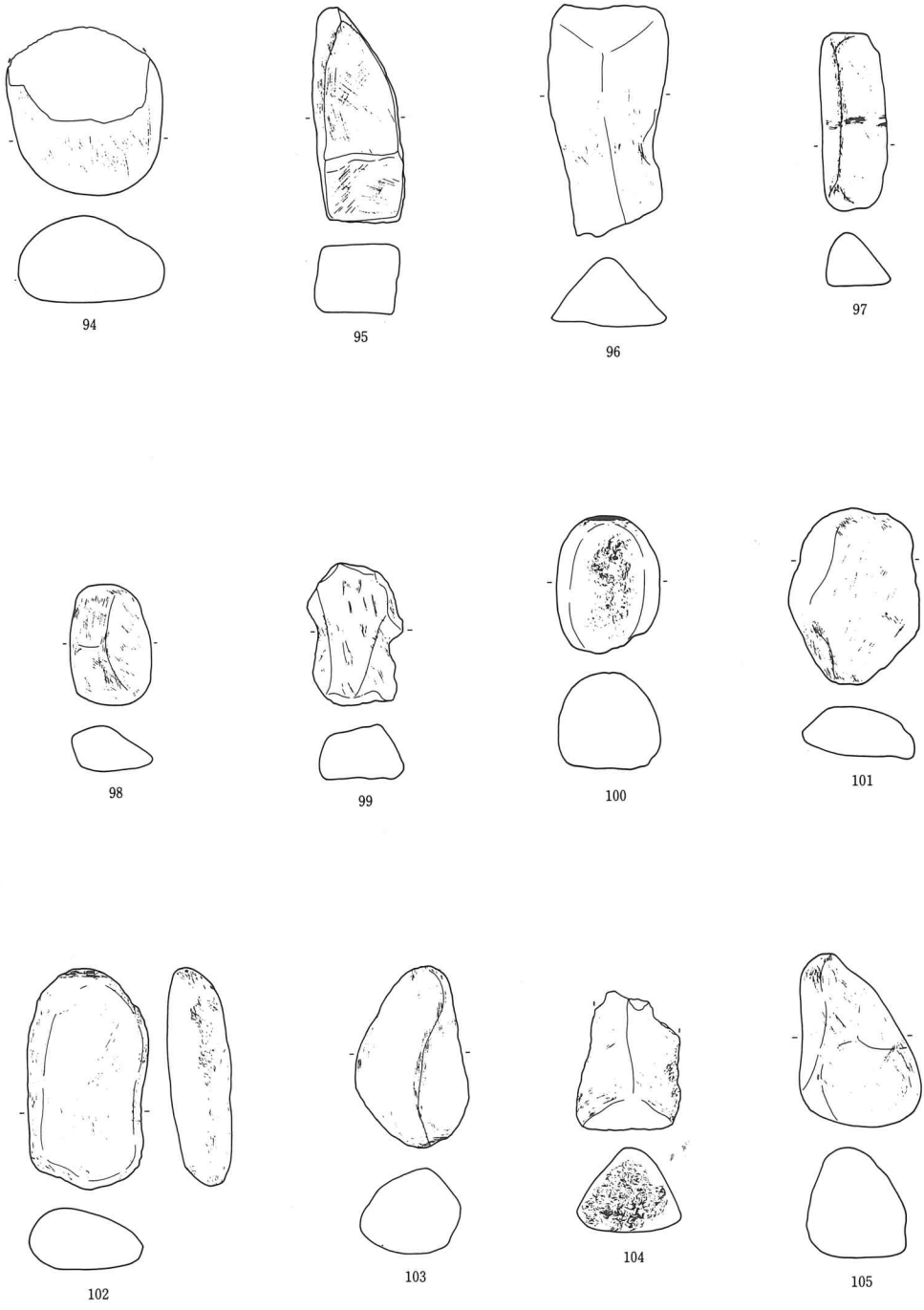
92



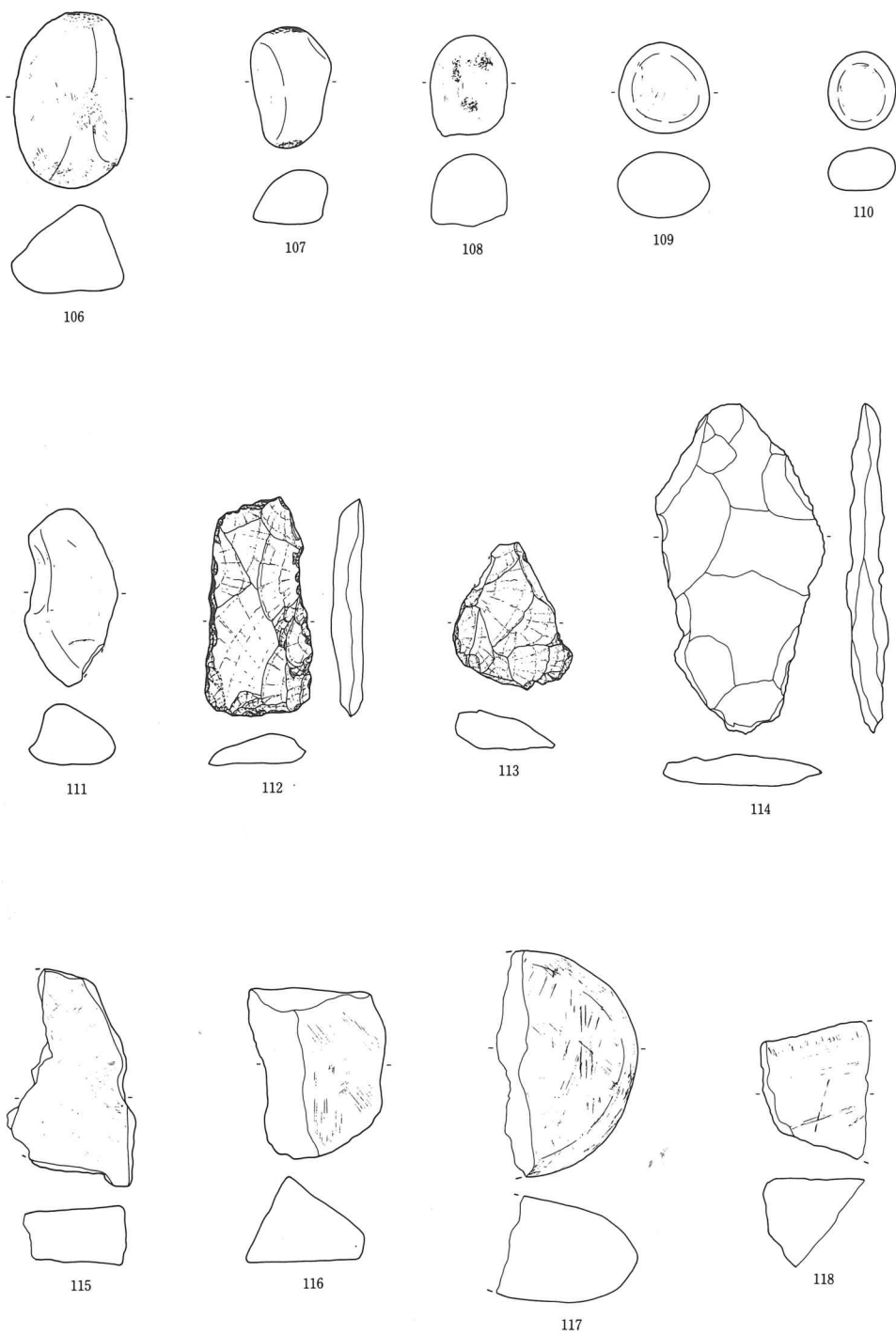
93

0 (1 : 4) 5 cm

第23图 掘出土遺物実測図(10)

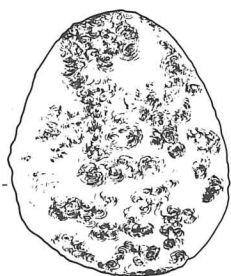


第24图 掘出土遺物実測図(11)

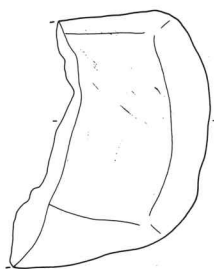
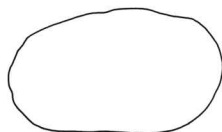


0 (1 : 4) 5 cm

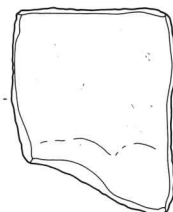
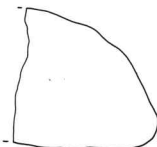
第25图 掘出土遺物実測図(12)



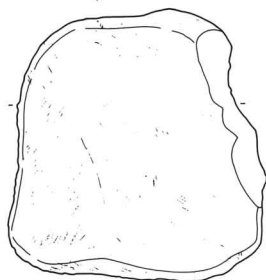
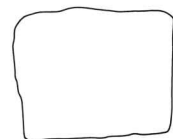
119



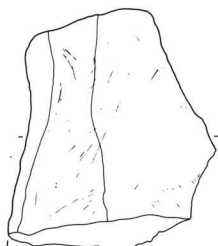
120



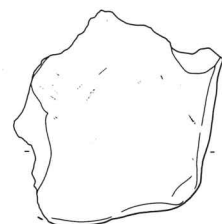
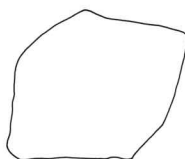
121



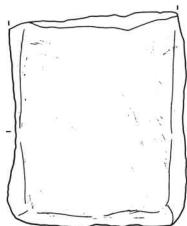
122



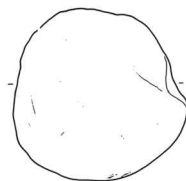
123



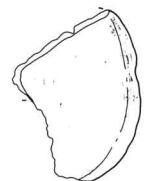
124



125



126

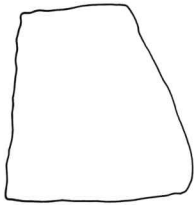
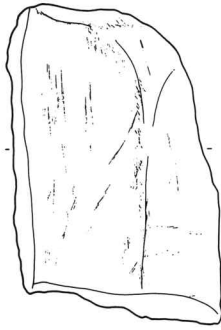


127

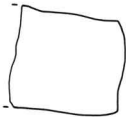
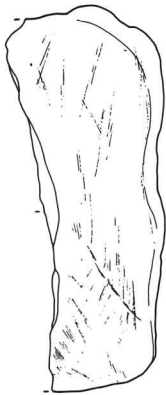


0 (1 : 4) 5 cm

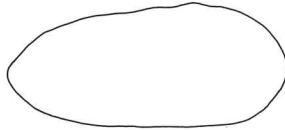
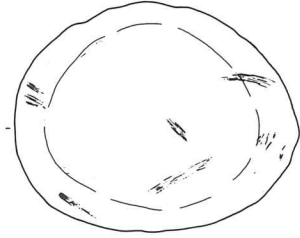
第26图 堀出土遺物実測図(13)



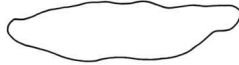
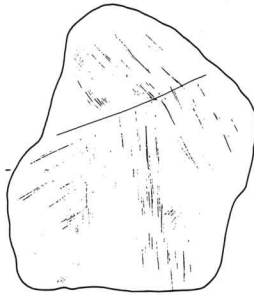
128



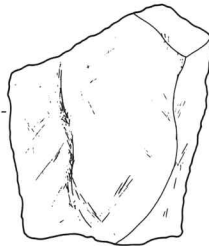
131



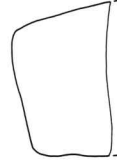
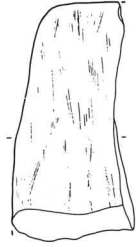
129



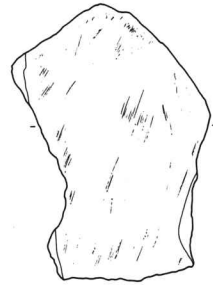
132



134



130



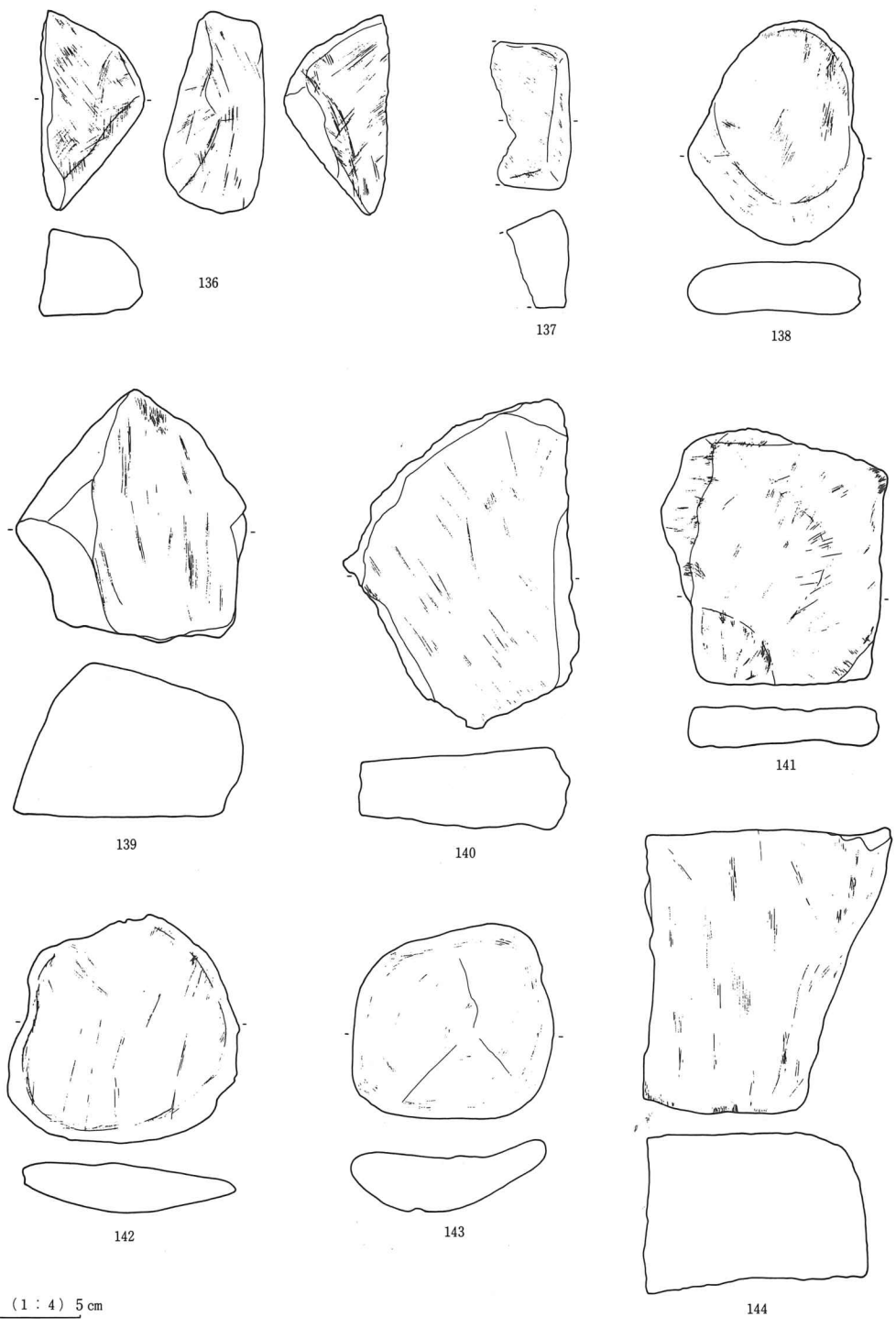
133



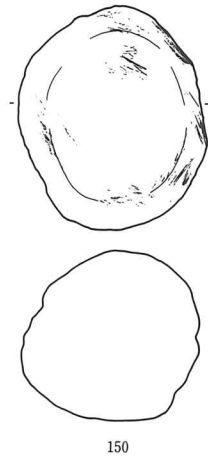
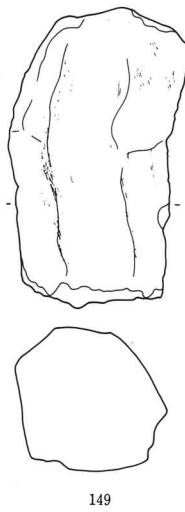
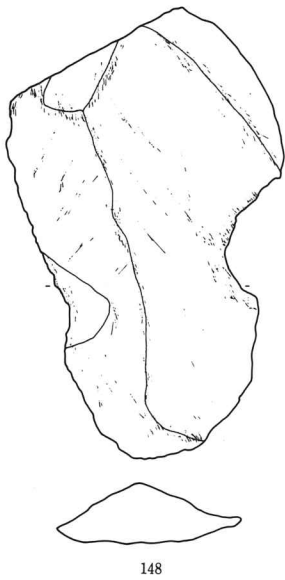
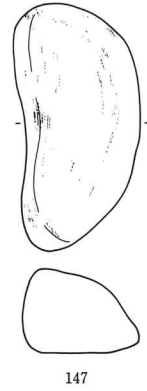
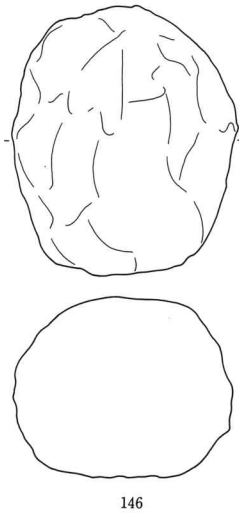
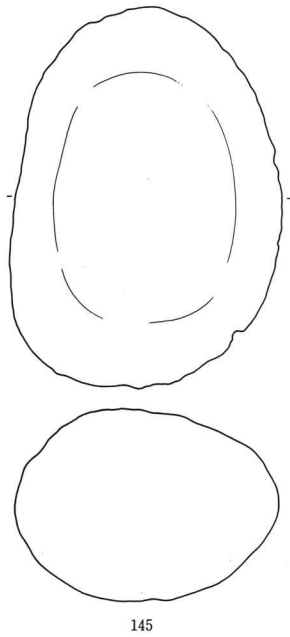
135

0 (1 : 4) 5 cm

第27図 堀出土遺物実測図(14)



第28图 堀出土遺物実測図(15)

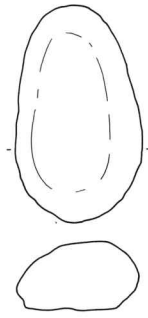


0 (1 : 4) 5 cm

第29图 堀出土遺物実測図(16)



151



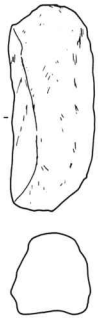
152



153



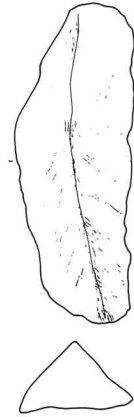
154



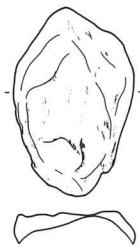
155



156



157



158



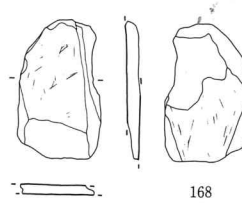
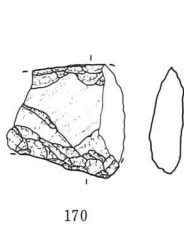
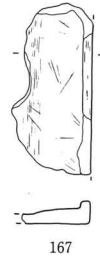
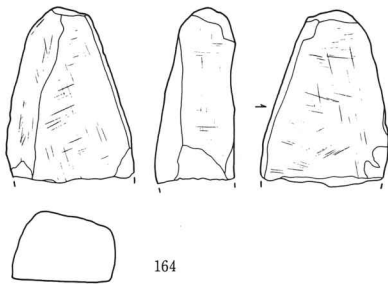
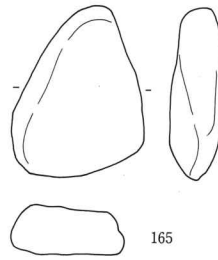
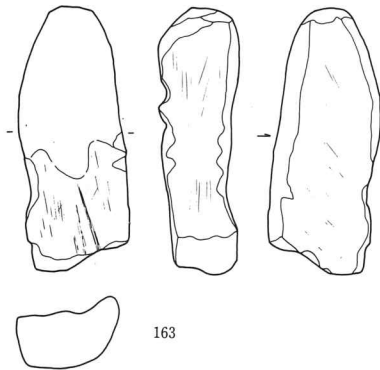
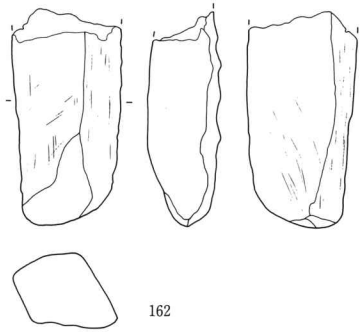
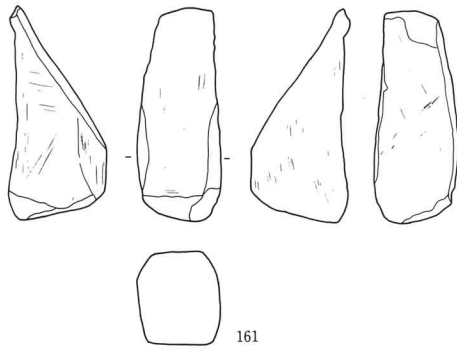
159



160

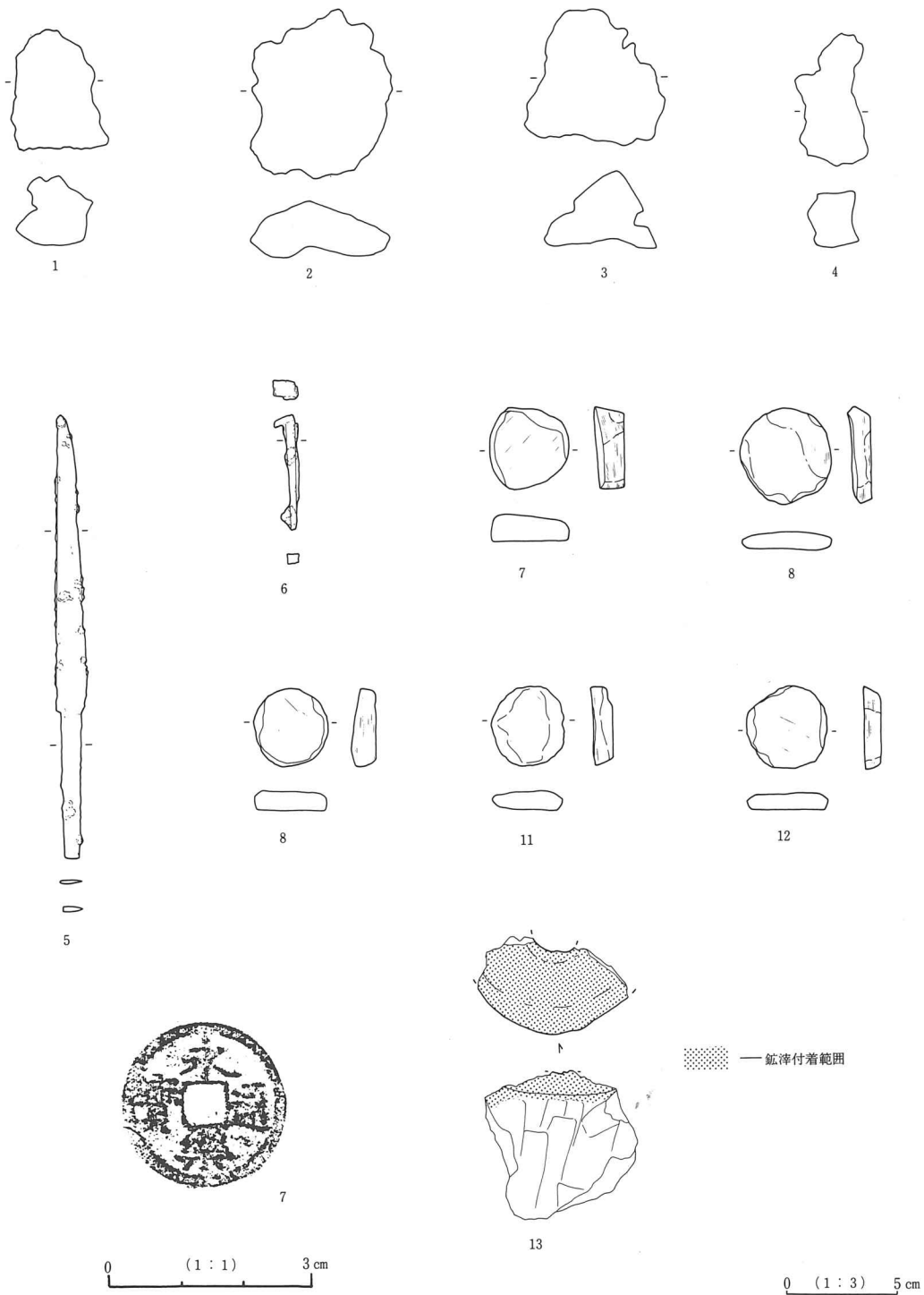
0 (1 : 4) 5 cm

第30图 掘出土遺物実測図(17)

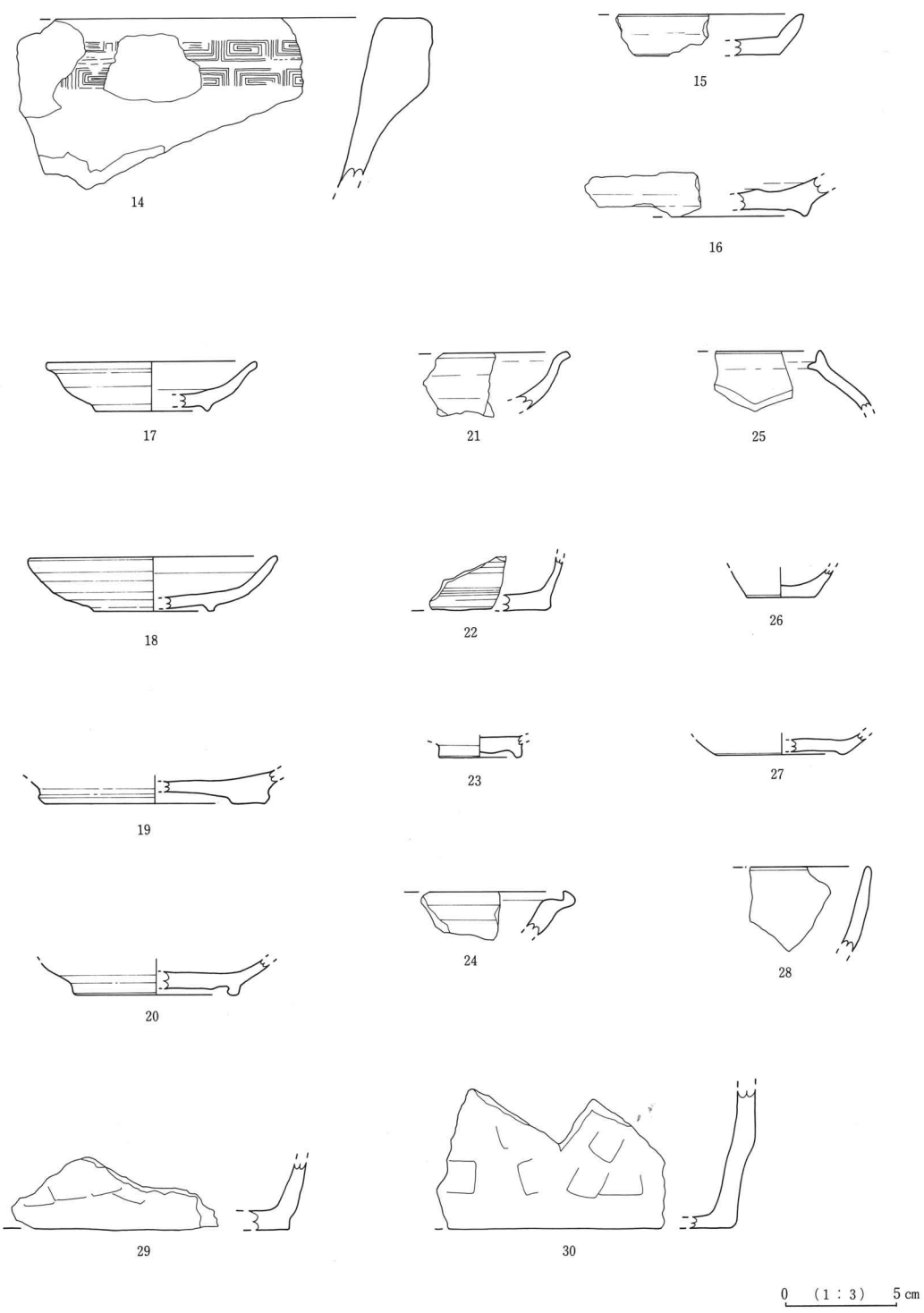


0 (1 : 3) 5 cm

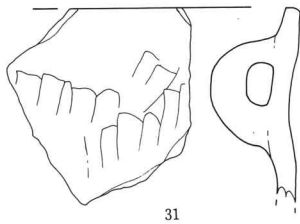
第31图 掘出土遺物実測図(18)



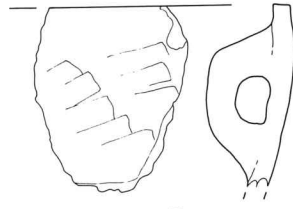
第32図 掘出土遺物実測図(19)



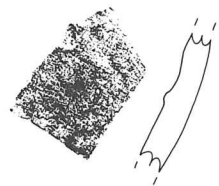
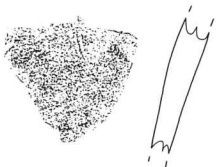
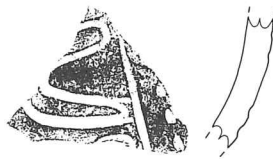
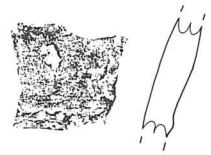
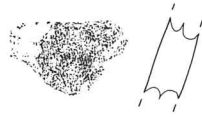
第33图 掘出土遺物実測図(20)



31



32



0 (1:3) 5cm

第34図 堀出土遺物実測図・土壘出土縄文土器拓影図

第4表 掘出土遺物一覧表(1)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
14-1	石 白	安山岩	No. 14	径 (24.0)		高 (9.9)	下白
14-2	石 白	安山岩	D 区 南	径 (28.4)		高 (9.1)	下白
14-3	石 白	安山岩	F 区 北	径 (28.6)		高 (12.4)	
14-4	播 鉢	安山岩	F 区 北	径 (25.1)		高 (13.2)	
14-5	播 鉢	安山岩	No. 4	径 (23.8)		高 (15.6)	
14-6	播 鉢	安山岩	No. 12	径 (20.2)		高 12.9	
14-7	台 石	安山岩					
14-8	播 鉢	安山岩	No. 6	径 17.1	内 径 11.1	高 10.2	
15-9	播 鉢	安山岩	B 区 北	径 (24.2)		高 19.1	
15-10	播 鉢	安山岩	A 区	径 (30.6)		高 14.5	
15-11	播 鉢	安山岩	No. 9	径 (26.8)		高 14.5	
15-12	五 輪	安山岩	No. 8			高 17.7	火輪部
15-13	五 輪	安山岩	No. 11			高 21.4	空風輪部
16-14	石 櫃	安山岩	No. 1	15.5	—	5.8	当初は四ヶ所に刻字
16-15	石 白	安山岩	D 区 南	径 27.8	—	<10.1>	上白
16-16	台 石	安山岩	B 区 南	22.3	20.2	6.2	
16-17	台 石	安山岩	F 区 東	25.1	23.4	6.8	
16-18	台 石	安山岩	D 区 南	16.6	15.2	13.1	
17-19	台 石	安山岩	D 区 北	18.4	<12.8>	<10.1>	
17-20	台 石	安山岩	D 区 南	20.8	13.6	12.2	
17-21	台 石	安山岩	C 区 南	15.2	<10.4>	<10.6>	
17-22	台 石	安山岩	B 区 北	26.2	10.8	7.8	敵台か
17-23	台 石	安山岩	た 20 G	24.1	18.4	5.1	

第5表 掘出土遺物一覧表(2)

挿図 番号	器種	石質	出土区	法量 cm			備考
				長さ	巾	高さ	
17-24	台石	安山岩	C区南	<29.8>	<7.3>	<3.9>	
17-25	台石	安山岩	B区南	24.0	13.4	6.4	
17-26	台石	安山岩	C区南	25.2	17.1	5.8	
17-27	台石	安山岩	D区南	25.1	16.0	3.8	
18-28	凹石	安山岩	F区北	径 19.2	孔径 12.4	高さ 7.1	
18-29	凹石	安山岩	No. 2	径 15.1	孔径 8.4	高さ 10.1	
18-30	播鉢	安山岩	F区北			高さ <4.2>	
18-31	播鉢	黒色多孔質 安山岩	F区東			高さ <11.4>	
18-32	石白	安山岩	B区北			<4.8>	上白
18-33	石白	安山岩	C区南			<4.1>	上白
18-34	石白	安山岩	B区北			<4.3>	上白
18-35	石白	安山岩	B区北			<4.2>	上白
18-36	石白	安山岩	B区北			<3.7>	上白
18-37	紡錘車	軽石	No. 13	径 9.4	孔径 1.1	3.6	
19-38	砥石	安山岩	F区北	16.6	9.3	8.6	
19-39	砥石	安山岩	D区南	15.0	7.2	6.3	
19-40	砥石	安山岩	A区	22.2	6.9	7.7	使用面四面
19-41	砥石	安山岩	A区	21.4	13.1	5.9	使用面三面
19-42	砥石	安山岩	C区南	16.2	12.4	4.2	使用面三面
19-43	砥石	安山岩	B区北	<7.7>	4.0	2.3	二面砥、線状痕有
19-44	砥石	安山岩	D区北	9.0	7.2	3.5	線条痕有
19-45	砥石	砂岩	B区北	<3.8>	3.1	<2.2>	使用面四面(現存)
19-46	砥石	安山岩	D区南	11.5	11.3	3.7	使用面二面

第6表 掘出土遺物一覽表(3)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
20-47	砥石	安山岩	D区南	15.5	9.3	2.8	使用面四面
20-48	砥石	安山岩	F区北	15.3	6.8	11.3	使用面五面
20-49	砥石	安山岩	D区北	15.0	11.4	5.2	使用面二面
20-50	砥石	安山岩	A区	17.3	10.6	2.6	使用面二面
20-51	砥石	安山岩	B区北	17.0	6.4	3.2	使用面二面
20-52	砥石	安山岩	A区	16.0	6.4	2.9	使用面三面
20-53	砥石	安山岩	F区北	16.8	3.5	3.2	使用面四面
20-54	砥石	安山岩	D区南	15.1	6.3	5.4	使用面四面
20-55	多目的石器	安山岩	B区北	15.1	6.3	3.3	砥石・敲石併用 砥面三面、外周に敲打痕
20-56	砥石	安山岩	D区南	13.4	8.9	3.6	使用面三面
21-57	砥石	安山岩	た 20 G	12.0	9.8	9.9	使用面二面、線條痕有
21-58	砥石	安山岩	B区北	13.5	8.7	2.1	使用面二面
21-59	砥石	安山岩	B区北	<12.7>	< 8.0>	< 5.0>	
21-60	砥石	安山岩	F区北	12.8	4.4	3.6	使用面二面
21-61	砥石	安山岩	C区南	13.4	4.9	3.5	使用面三面、使用頻度低
21-62	砥石	玻璃質 安山岩	F区北	<13.2>	< 5.6>	< 3.0>	使用面二面(現存)
21-63	砥石	安山岩	F区北	11.1	4.2	3.4	使用面三面
21-64	砥石	安山岩	F区北	14.7	5.7	4.0	使用面四面
21-65	砥石	安山岩	B区北	12.1	5.9	4.2	三面砥
21-66	砥石	安山岩	D区南	13.3	5.5	2.5	使用面四面
21-67	砥石	安山岩	D区南	10.7	3.8	3.5	使用面四面
21-68	砥石	玄武岩	C区南	12.8	5.7	< 1.5>	使用面二面(現存)
22-69	砥石	玻璃質 安山岩	D区北	<12.3>	< 3.8>	< 3.2>	使用面二面(現存)

第7表 掘出土遺物一覧表(4)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
22-70	砥石	安山岩	F区北	10.6	5.5	3.9	使用頻度低、使用面二面
22-71	砥石	安山岩	D区南	9.9	8.2	2.3	使用面二面
22-72	砥石	安山岩	B区南	10.2	8.0	1.2	使用面二面
22-73	砥石	花崗岩	F区北	8.0	6.8	2.0	使用面一面
22-74	砥石	安山岩	B区南	10.6	7.2	2.2	使用面二面
22-75	砥石	安山岩	E区東	6.8	7.0	3.9	使用面二面
22-76	砥石	安山岩	B区北	< 8.6 >	6.7	2.3	使用面二面
22-77	砥石	安山岩	D区南	10.3	5.8	4.3	使用面四面
22-78	砥石	粘板岩	F区北	7.7	3.6	1.6	
22-79	砥石	安山岩	F区北	<10.7>	< 5.6 >	< 4.2 >	使用面四面
22-80	多目的石器	安山岩	B区南	13.3	7.6	3.2	砥石・敲石併用 使用面二面
22-81	多目的石器	安山岩	F区北	22.3	8.2	2.8	砥石・敲石併用 使用面三面
23-82	敲石	輝石安山岩	B区南	14.8	6.9	2.9	端部・外周を中心に使用痕
23-83	敲石	安山岩	F区北	13.2	< 4.5 >	4.1	外周を中心に敲打痕
23-84	敲石	安山岩	B区南	12.0	5.3	3.1	稜を中心に使用痕
23-85	敲石	玻璃質 安山岩	B区北	14.3	5.2	4.9	外周・稜を中心に使用痕
23-86	敲石	安山岩	D区北	15.2	4.7	3.5	外周・稜を中心に使用痕
23-87	敲石	安山岩	B区南	14.9	4.2	3.3	稜を中心に使用痕
23-88	敲石	安山岩	C区南	12.0	5.5	3.6	稜・端部に使用痕
23-89	敲石	輝石安山岩	D区南	12.1	4.6	2.9	表面に使用痕
23-90	敲石	安山岩	D区南	8.4	5.1	3.1	外周・稜を中心に使用痕
23-91	敲石	安山岩	F区北	12.4	5.8	3.8	稜を中心に使用痕
23-92	敲石	安山岩	Z	10.7	6.2	4.7	稜を中心に擦過痕

第8表 掘出土遺物一覧表(5)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
23-93	敲 石	安 山 岩	F 区 北	11.9	5.1	4.8	両端に敲打痕、稜に擦過痕
24-94	敲 石	安 山 岩	B 区 北	< 9.4 >	8.7	4.9	表面に使用痕
24-95	敲 石	安 山 岩	C 区 南	11.8	4.8	4.8	砥石の可能性も有
24-96	敲 石	安 山 岩	B 区 北	12.7	6.7	3.5	
24-97	敲 石	安 山 岩	D 区 北	9.9	3.7	3.3	稜を中心に使用痕
24-98	敲 石 ?	玄 武 岩	B 区 南	6.7	4.6	2.5	使用痕有
24-99	敲 石 ?	安 山 岩	D 区 南	8.1	5.3	3.4	使用痕有
24-100	多目的石器	花 崗 岩	D 区 南	7.7	5.8	5.5	敲石・擦石併用 端部に擦面
24-101	多目的石器	安 山 岩	F 区 北	9.8	7.2	3.4	擦石・敲石併用
24-102	多目的石器	石 英 安 山 岩	C 区 南	12.2	6.7	3.6	擦石・敲石併用 端部に擦面、外周に敲打痕
24-103	多目的石器	安 山 岩	D 区 南	10.2	6.3	5.0	擦石・敲石併用
24-104	多目的石器	花 崗 岩	F 区 北	7.7	5.7	4.5	擦石・敲石併用 端部に擦面
24-105	擦 石	安 山 岩	B 区 北	9.6	5.1	6.2	
25-106	擦 石	安 山 岩	D 区 南	9.9	6.1	4.9	端部・稜に使用痕
25-107	擦 石	花 崗 岩	B 区 北	6.9	4.6	3.2	端部に擦面
25-108	擦 石	安 山 岩	B 区 北	5.6	4.3	4.1	表面に使用痕有
25-109	擦 石	花 崗 岩	C 区 南	5.2	5.1	3.8	表面に使用擦過痕
25-110	擦 石	安 山 岩	B 区 北	4.4	3.9	2.5	
25-111	擦 石 ?	安 山 岩	B 区 北	10.1	5.3	4.1	
25-112	打製石斧	安 山 岩	A 区	12.4	6.1	1.9	刃部に使用痕
25-113	打製石斧	玄 武 岩	D 区 南	8.3	6.8	2.5	未成品、製作時に欠損
25-114	不 明	安 山 岩	B 区 南	18.1	9.6	2.5	打斧未製品か
25-115	台 石	安 山 岩	E 区 北	12.3	< 7.3 >	4.0	使用頻度の低い砥石とも考えられる

第9表 掘出土遺物一覧表(6)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
25-116	台 石	安 山 岩	D 区 北	9.7	7.8	5.6	
25-117	台 石	安 山 岩	D 区 南	12.8	8.0	6.0	敲台か、表面に煤付着
25-118	台 石	安 山 岩	D 区 北	<7.8>	<6.2>	<5.1>	使用擦過痕有
26-119	台 石	輝石安山岩	E 区 東	14.3	11.7	7.1	敲台
26-120	台 石	安 山 岩	B 区 北	13.7	<10.7>	<7.7>	使用痕か
26-121	台 石	安 山 岩	B 区 北	10.9	8.6	6.5	
26-122	台 石	安 山 岩	D 区 南	14.3	13.4	4.5	表面に擦過痕
26-123	台 石	安 山 岩	D 区 北	<12.6>	<10.4>	<8.2>	表面に擦過痕
26-124	台 石	細粒安山岩	D 区 南	<11.5>	<11.2>	<4.0>	
26-125	台 石	安 山 岩	F 区 北	<11.3>	9.4	4.4	表面に擦過痕、敲台か
26-126	台 石	石英安山岩	A 区	9.2	9.2	3.0	
26-127	台 石	安 山 岩	F 区 北	<9.1>	<6.7>	<4.5>	
27-128	台 石	安 山 岩	C 区 南	17.0	11.5	10.6	表面に擦過痕
27-129	台 石	安 山 岩	F 区 北	15.1	12.2	6.5	表面に擦過痕、敲台か
27-130	台 石	安 山 岩	F 区 北	<12.7>	<6.5>	<8.6>	表面に擦過痕
27-131	台 石	安 山 岩	B 区 北	20.4	<8.4>	<6.5>	表面に擦過痕
27-132	台 石	安 山 岩	D 区 南	15.4	13.3	3.3	表面に擦過痕
27-133	台 石	安 山 岩	B 区 北	14.7	9.3	3.3	表面に擦過痕、敲台か
27-134	台 石	安 山 岩	E 区 北	12.8	10.7	5.8	
27-135	台 石	安 山 岩	B 区 南	<6.6>	<4.4>	<3.2>	擦過痕有
28-136	台 石 ?	安 山 岩	D 区 南	11.6	6.1	5.5	表面にかなりの擦過痕
28-137	台 石	安 山 岩	F 区 北	8.6	<4.6>	6.1	表面に擦過痕
28-138	台 石	安 山 岩	C 区 南	12.9	10.2	3.1	表面に擦過痕

第10表 掘出土遺物一覧表(7)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
28-139	台 石	安山岩	C 区 南	16.2	13.4	8.9	わずかに擦過痕
28-140	台 石	安山岩	D 区 北	19.1	13.7	5.2	擦過痕有
28-141	台 石	安山岩	D 区 南	14.8	13.0	2.4	稜を中心に擦過痕
28-142	台 石	安山岩	た 20 G	13.3	13.5	3.3	わずかに擦過痕
28-143	台 石	石英安山岩	B 区 北	11.3	11.7	4.1	
28-144	台 石	安山岩	A 区	16.4	14.2	9.6	表面に擦過痕
29-145	不 明	安山岩	D 区 南	20.2	14.4	10.1	
29-146	不 明	安山岩	C 区 南	14.3	12.1	9.5	
29-147	不 明	安山岩	D 区 南	11.2	6.7	5.9	
29-148	不 明	安山岩	B 区 北	23.9	14.6	5.1	
29-149	不 明	安山岩	B 区 北	15.5	8.3	7.6	砥石未成品か
29-150	不 明	黒色多孔質 安山岩	B 区 北	11.3	10.1	9.1	
30-151	不 明	玻璃質 安山岩	D 区 南	15.5	7.0	4.1	
30-152	不 明	安山岩	E 区 東	11.5	6.7	3.9	
30-153	不 明	玻璃質 安山岩	F 区 北	16.1	5.4	4.2	
30-154	不 明	安山岩	D 区 南	14.8	6.3	2.8	
30-155	不 明	安山岩	D 区 北	10.9	4.6	4.5	
30-156	不 明	安山岩	D 区 南	16.3	5.1	4.1	
30-157	不 明	石英安山岩	D 区 南	17.0	6.4	4.1	
30-158	不 明	チャート	F 区 北	10.1	6.5	3.3	
30-159	不 明	チャート	F 区 北	11.9	5.0	4.2	
30-160	不 明	安山岩	B 区 北	6.3	4.8	2.4	
31-161	砥 石	流紋岩	A 区	8.5	3.3	3.8	

第11表 掘出土遺物一覽表(8)

挿 図 番 号	器 種	石 質	出 土 区	法 量 cm			備 考
				長 さ	巾	厚 さ	
31-162	砥 石	流 紋 岩	D 区 南	<8.6>	4.3	2.9	使用面四面
31-163	砥 石	流 紋 岩	B 区 北	10.6	4.1	3.2	使用面四面
31-164	砥 石	流 紋 岩	B 区 北	<7.0>	<5.0>	<3.1>	使用面四面
31-165	不 明	安 山 岩	A 区	6.7	5.3	2.0	砥石か
31-166	硯	粘 板 岩	B 区 北	<8.2>	<3.4>	<0.5>	
31-167	硯	粘 板 岩	D 区 南	<6.6>	<3.2>	<0.9>	
31-168	硯	粘 板 岩	B 区 南	<5.5>	<3.3>	<0.5>	
31-169	不 明	粘 板 岩	Z	1.7	1.6	0.6	
31-170	打 斧	安 山 岩	C 区 南	<4.7>	4.5	1.2	基部折損
32- 1	鉞 滓	鉄	A 区	5.2×4.2		3.1	重量87.4 g
32- 2	鉞 滓	鉄	B 区 北	7.4×6.1		2.0	重量155.4 g
32- 3	鉞 滓	鉄	B 区 南	5.9×6.0		3.1	重量127.8 g
32- 4	鉞 滓	鉄	B 区 北	5.9×3.0		2.4	重量49.8 g
32- 5	小 柄	鉄	No.5	刃渡り 13.15	長 さ 19.7	巾 1.4	
32- 6	角 釘	鉄	B 区 北	5.1	0.5	頭 1.15	
32- 7	古 銭	永 楽 通 宝	D 区 南	径 2.4	初鑄年1408 (明永楽6年)		
32- 8	土製円板	内 耳 土 器	B 区 南	3.5×3.3		1.1	
32- 9	石製円板	安 山 岩	D 区 南	3.6×3.5		1.3	
32-10	土製円板	内 耳 土 器	た 20 G	4.3×4.0		0.9	
32-11	土製円板	内 耳 土 器	Z	3.5×3.2		0.9	
32-12	土製円板	内 耳 土 器	D 区 南	3.7×3.6		0.8	
32-13	羽 口		B 区 北	鉞滓溶着			

第12表 掘出土遺物一覧表(9)

挿 番 号	種 類	出 土 区	法 量 cm	備 考
33-14	手 焙 り	F 区 北		瓦質、口辺部にスタンプ文様
33-15	土師質土器	F 区 北		底部回転糸切
33-16	須恵質土器	D 区 北		底部回転ヘラケズ
33-17	瀬 戸	E 区 東	台径 (5.0) 器高 2.2 口径 (9.4)	削り出し高台 内面中央に花卉紋か
33-18	瀬 戸	A 区	台径 (5.4) 器高 2.4 口径(11.0)	削り出し高台
33-19	青 磁	B 区 南	底径 (9.8)	削り出し高台
33-20	不 明	Z	底径 (7.2)	施釉陶器
33-21	瀬 戸	A 区		
33-22	不 明	B 区 南		施釉陶器
33-23	不 明	Z	底径 3.6	施釉陶器
33-24	瀬 戸	C 区 南		
33-25	不 明	Z		近世陶器
33-26	瀬 戸	Z	底径 3.0	底部回転糸切
33-27	瀬 戸	F 区 北	底径 5.6	削り出し高台
33-28	不 明	B 区 南		施釉陶器 (近世か)
33-29	内耳土器	E 区		
33-30	内耳土器	E 区		

している。その内安山岩製（19—38～44・46、20—47～54・56、21—57～61・63～67、22—70～72・74～77・79）が35点、流紋岩製（31—161～164）が4点、砂岩製（19—45）が1点、玻璃質安山岩製（21—62、22—69）が2点、玄武岩製（21—68）が1点、花崗岩製（22—73）が1点、粘板岩製（22—78）が1点である。

多目的石器（20—55、22—80・81、24—100～104）は8点が出土している。その内、砥石と敲石を併用したもの（20—55、22—80・81）は3点で、敲石と擦石を併用したもの（20—55、22—80・81）は3点で、敲石と擦石を併用したもの（24—100～104）が5点である。

紡錘車（18—37）は軽石製の1点のみが出土している。

敲石（23—82～93、24—94～99）は18点が出土している。輝石安山岩製（23—82・89）が2点、玻璃質安山岩製（23—85）が1点、玄武岩製（24—98）が1点で、他は全て安山岩製である。

擦石（24—105、25—106～111）は6点が出土している。その内、安山岩製（24—105、25—106・108・110）が4点、花崗岩製（25—207・209）が2点である。なお、端部を擦面として使用したものと、面を擦面としたものに分かれる。

打製石斧（25—112・113、31—170）は3点が出土している。112は使用頻度の高い安山岩製のもので、刃部・稜を中心に使用磨耗痕が認められる。113は玄武岩製の未成品で、制作途中に折損している。114は安山岩製で、基部が折損している。

硯（31—166～168）は粘板岩製で、全て破片である。

鉾滓（32—1～4）は全て鉄滓と考えられる。また羽口は2点が出土し、32—13の1点のみ図示した。これら製鉄関連遺物は、全て門跡より南側で出土している。つまり主郭の南側地区に製鉄址があった可能性がある。

小柄（32—5）は1点のみ出土した。全長19.7cmで、刃渡り13.15cmを測る。刃部が多少欠損する他は完形である。

角釘（32—6）は1点のみ出土した。先端を欠損している。

古銭は永樂通宝（32—7）の1点のみが出土している。

石製円板（32—9）は安山岩製で、土製円板（32—8・10～12）は4点とも内耳土器の破片を利用して利用している。使用目的は不明である。

なお33—14～30、34—31・32は挿図と表を参照されたい。

第34図の33以下は縄文時代後期初頭の深鉢の破片である。

第V章 総 括



第35図 白岩城（里古城）・平尾城（山古城）位置図（1：25,000）

白岩城は、平尾氏の居館址である。この平尾氏は、小県郡の依田氏で、初代依田為泰が佐久郡平尾へ来て平尾良信と改名した時に始まる。つまり白岩城はこの時（15世紀中葉）に築城されたと考えられる。さらに二代目平尾守弘を経て、三代目平尾守信に至り、平尾城が築城される。さらに守信の時、平尾八幡宮（平尾大社）と皎月庵（守芳院前身）が建立されている。皎月庵は戦火で焼失するが、五代目平尾守芳によって守芳院として再建される。この守芳院も江戸時代（元禄）に火災に遭い、現在の地に再建されている。また守芳は天正三年に平尾大社本殿を再建して

いる。

白岩城（里古城）—平尾氏居館址— （第36図参照）

主郭は、東側と北側・南側と断面V字型の堀が巡り、その内側に犬走りが、さらに土塁が巡っている。今回の調査で明らかになったのは東側の堀と土塁、北側と南側の堀の一部である。土塁は上部が削平されているが、土塁構築土と構築石から考えて、確認面より1mは高さがあったろうと考えられる。また主郭の中央南寄りで門の跡が検出された。現在この門跡より東の現守芳院まで直線の道が続いており、平尾城へと登って行ける。つまりこの道が15世紀より今日まで使われていたことは明白である。北側の二郭の門跡は攪乱が著しく検出されなかったが、東側のほぼ中央に想定できる。また二郭の北側は現在墓地となっているが、明らかに土塁が残存している。北側の横根との境には、幅20m、比高15~10mの田切が走り、北からの侵入を防いでいる。また、二郭の北西と主郭西側には段曲輪と想定可能な地形を見る事ができる。なお主郭には平尾氏が、その東の現集落には「宿」という地名等から家人等が住んでいたと考えられる。

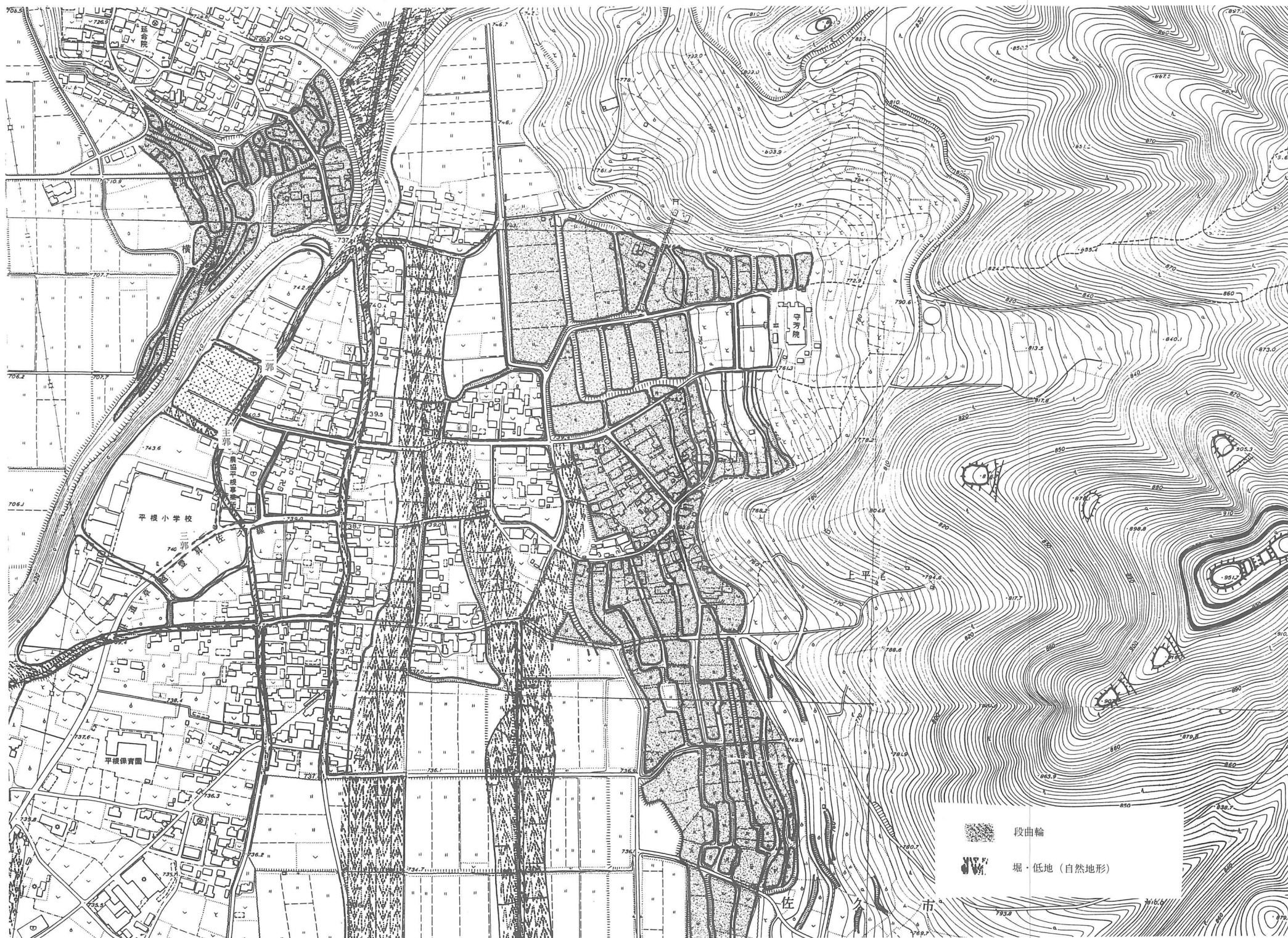
平尾城（山古城）・物見の城 （第36図・第37図参照）

平尾城は西より、二丸・本丸・三丸と続く連郭式の山城で、現守芳院との比高差は190.4mを、白岩城主郭との比高差は205.6mを測る。二丸と本丸との間に堀切が残存し、本丸と三丸の間にも明確ではないが二本の堀切が、三丸の東側に一本の堀切が存在する。また、それらを取り巻いて二重の帯曲輪が現存している。また北側を西側と南側には出丸が存在する。

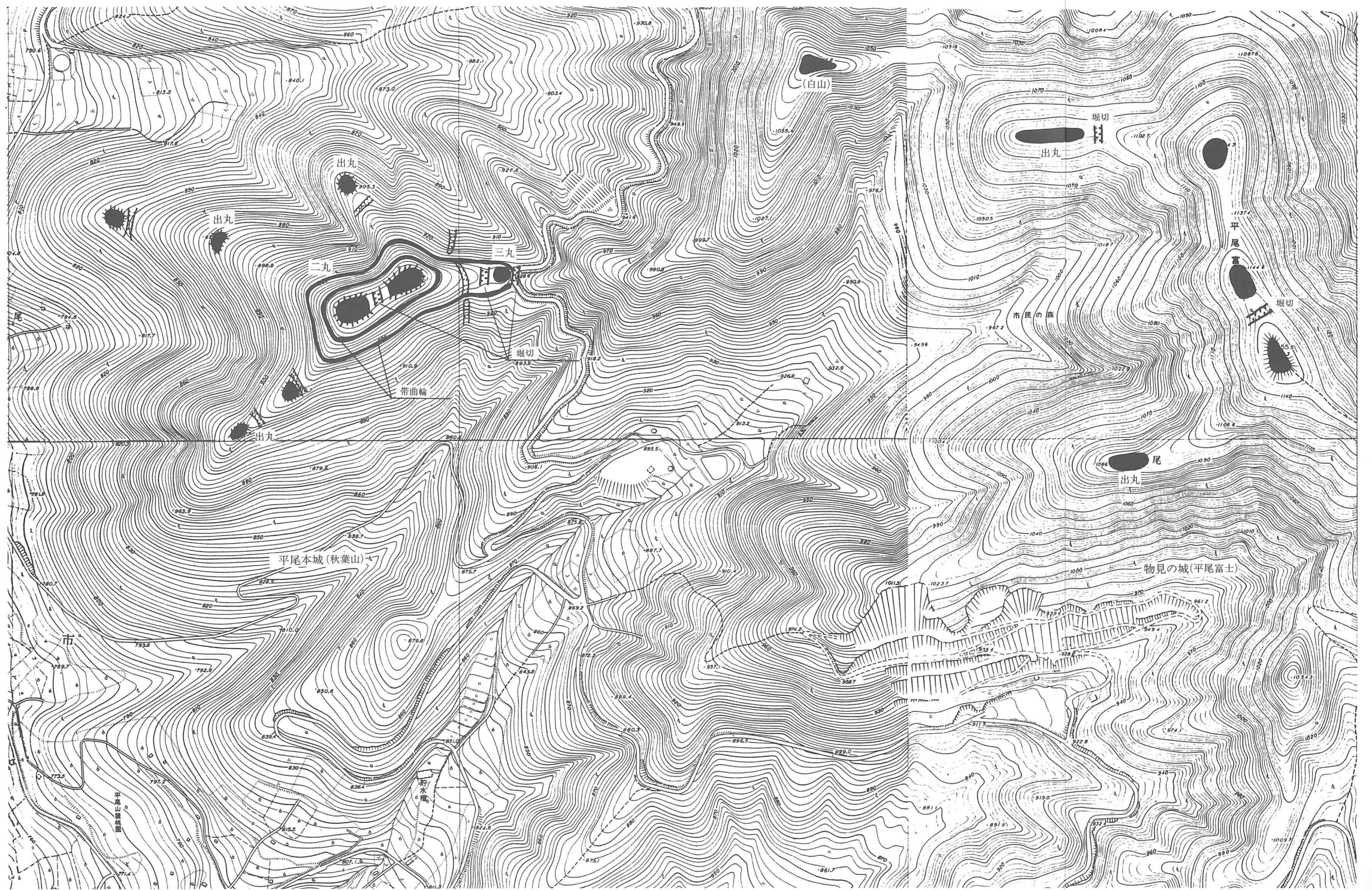
秋葉山（平尾城）の西のふもとには地形より数多くの段曲輪が想定される。これについては、故榎澤龍吉氏が著書「平尾守芳とその一統」の中で述べているように平時には畑作が行われていたと考えられよう。現在の残存状況は良好で、本丸と二丸には土塁が巡っている。また木内氏作成の縄張図（第38図）には数多くの段曲輪と石塁、井戸が記載されているので参照されたい。この平尾城の北東に白山があり、尾根づたいに平尾山頂へと続いている。この白山と平尾山頂が物見の城である。言うまでもなくここからは軽井沢・御代田・小諸・佐久・白田・浅科といった佐久平が一望できる。南より本丸、堀切を経て二丸・三丸と続き、西は出丸が二ヶ所存在する。本丸は一見凹んでいる様に見えるが、周囲を土塁が巡っていると考えた方が自然であろう。この物見の城は、守信が造築したと推考されるが、平尾城より要衝不落を呈しており、戦況に応じて白岩城→平尾城→物見城と移動したのではないだろうか。これについては私見であり、今後の研究を待ちたい。なお平尾山頂には白山より大正に移動された白山大権現を祀った石祠が現存する。参考までに平尾富士には木花開邪姫を祀った富士浅間神社、白山には伊邪那美命を祀った白山権現（現在平尾山頂へ移動）、秋葉山には火産霊神が祀られている。

最後に、調査に携わっていただいた方々に、心より感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。

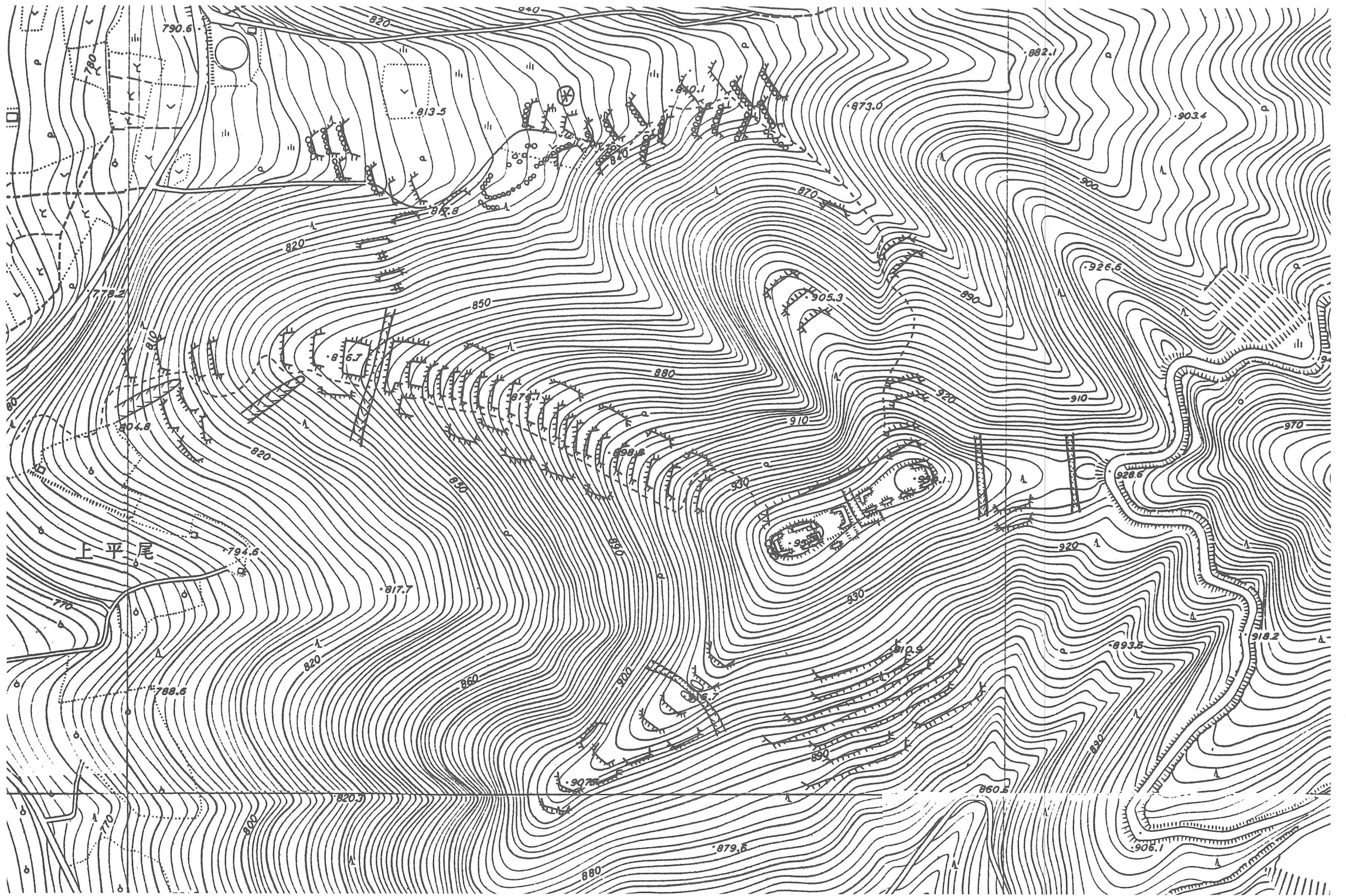
（羽毛田）



第36図 白岩城・平尾城縄張想定図A (1:5,000)



第37図 平尾城(山古城)縄張想定図B (1:5,000)



第38図 平尾城（山古城）縄張図（佐久市志編纂室 木内寛氏作成）（1：5,000）



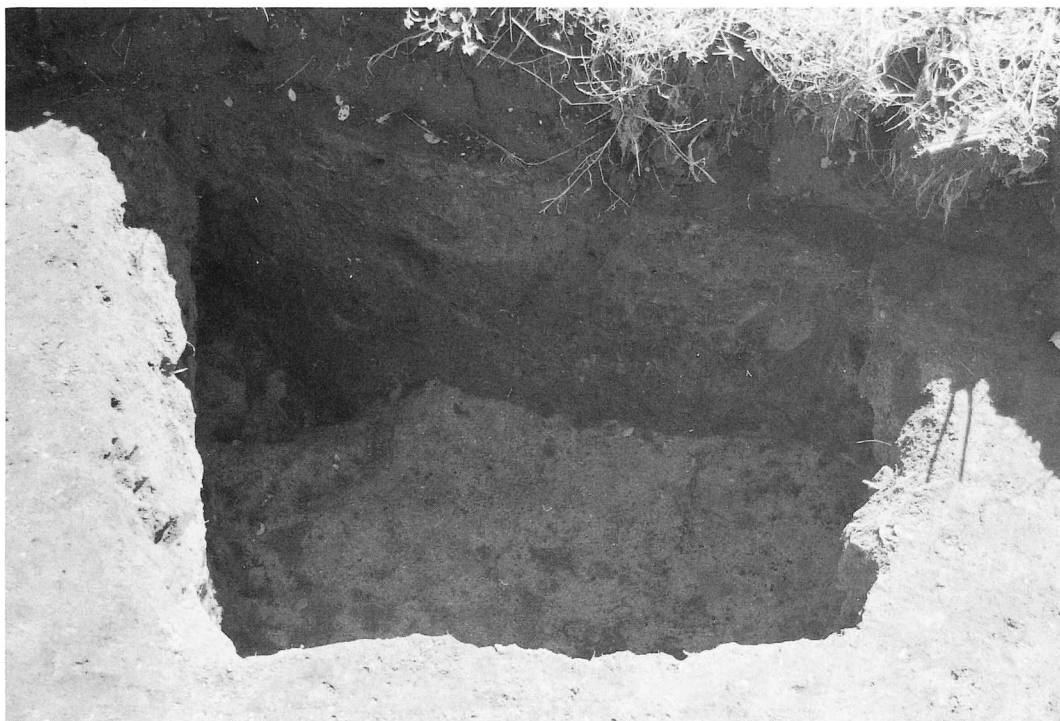
D1号土坑（北より）



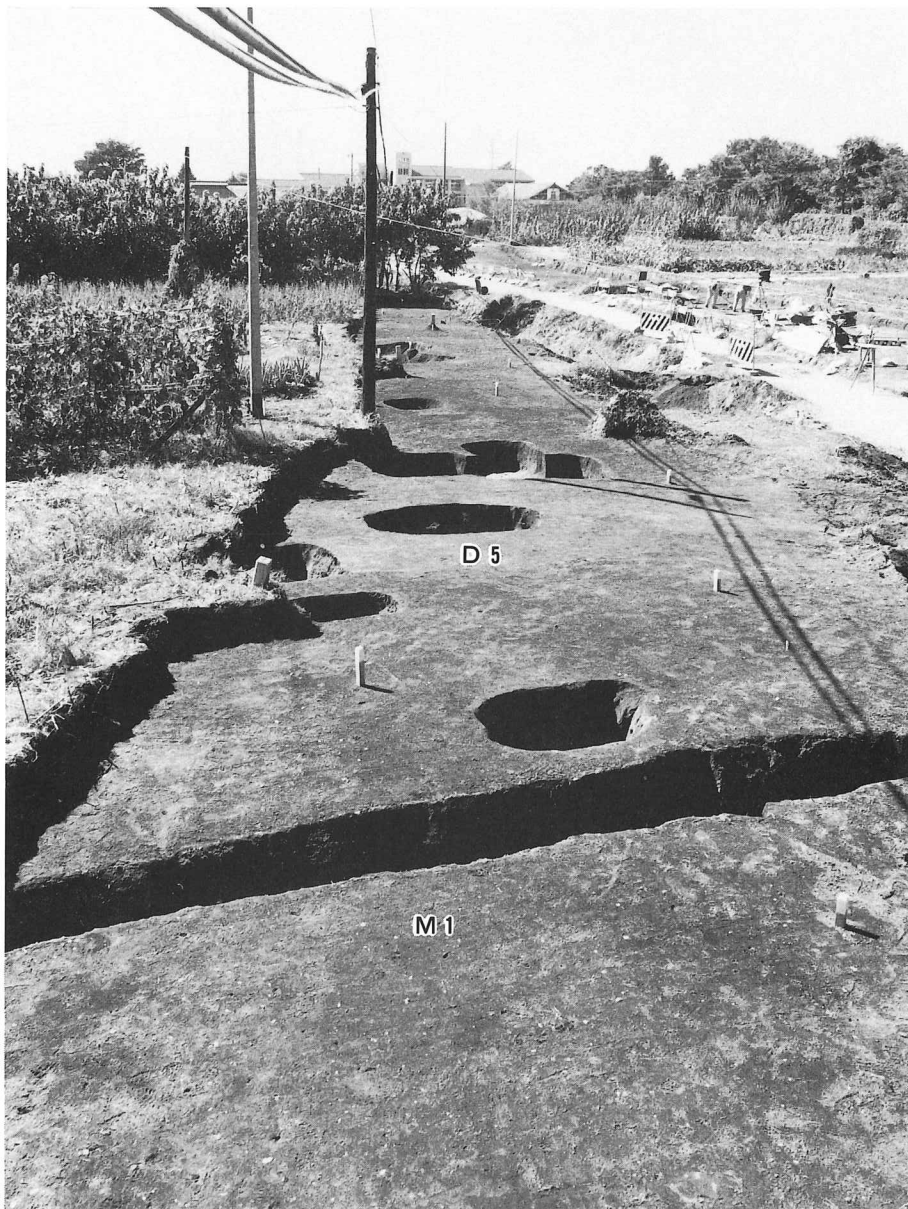
D2号土坑（北より）



D 3号土坑 (北より)



D 4号土坑 (西より)



北側全景写真（北より）



M1号溝状遺構（東より）



堀・土壘遠景（南より）



堀・土塁遠景（北より）



堀A区（北より）



堀A区（東より）



堀B区（北より）



堀B区・門跡（北より）



門跡（東より）



門跡（北より）



堀C区遠景（北より）



堀C区（北より）

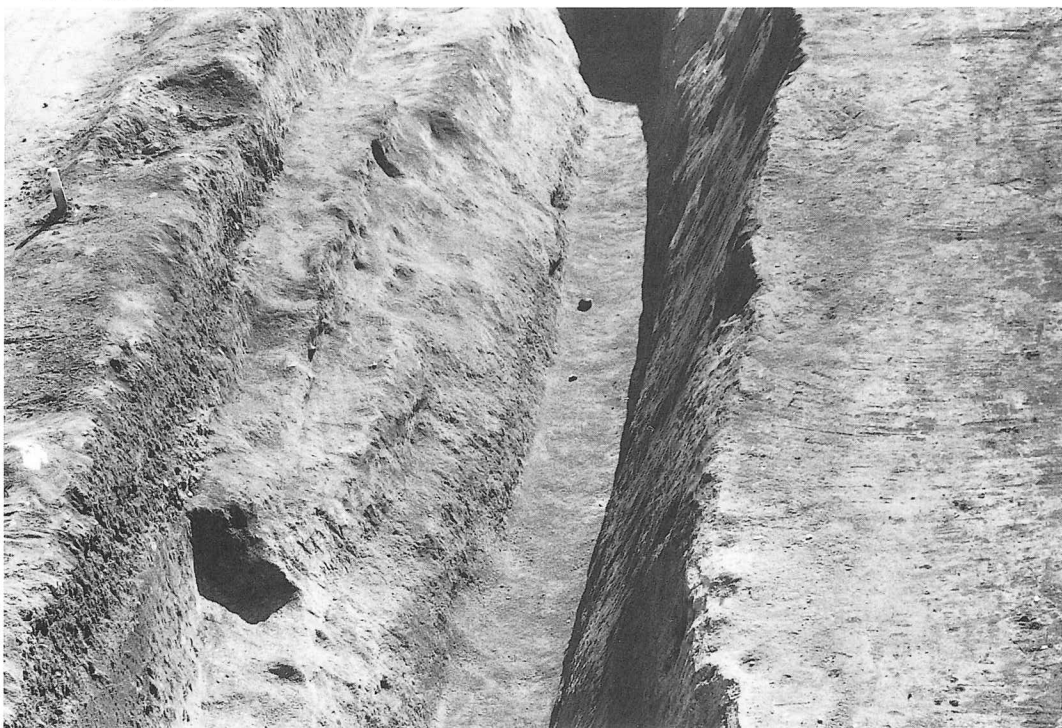




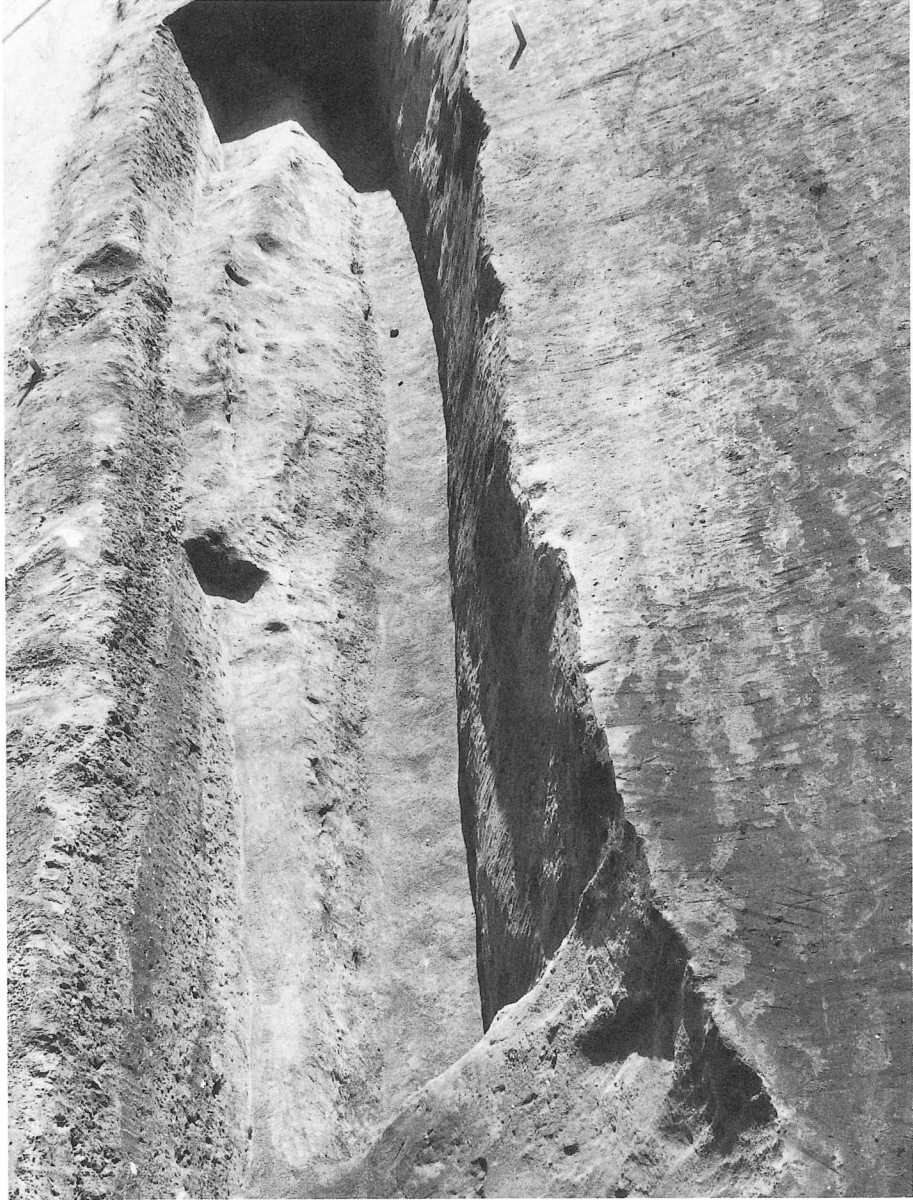
堀E・F区遠景（南より）



堀E区（北より）



堀F区（北より）



堀F区（北より）



土塁遠景（南より）



安原用水路敷設時の土層（左側）



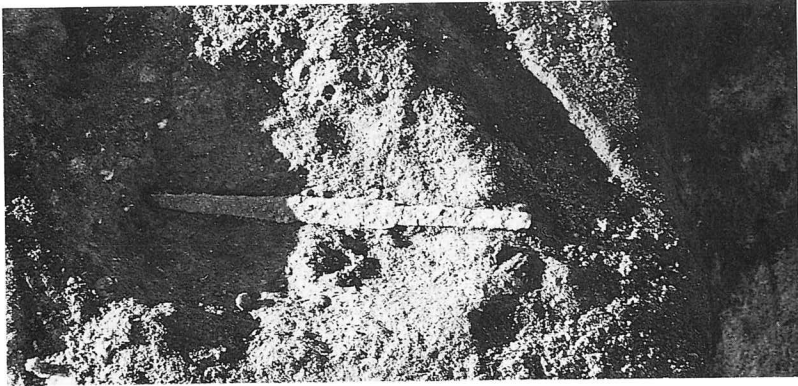
南側全景（南より）



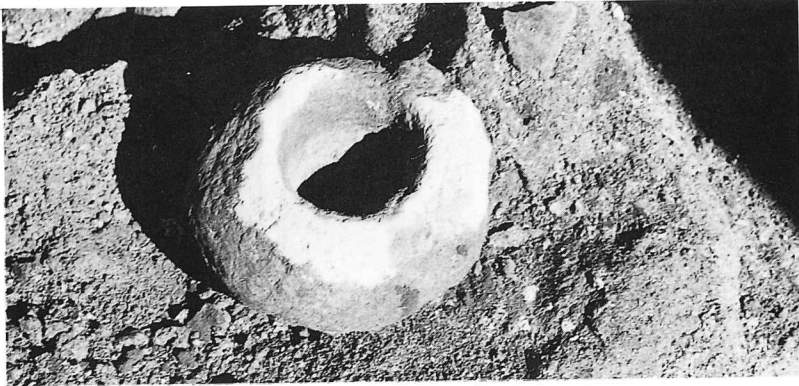
石櫃出土状態



凹石出土状態



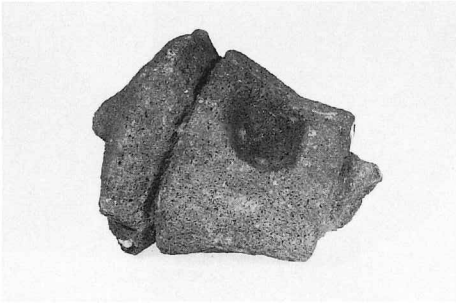
力子出土状態



凹石出土状態



白岩城（里古城）より平尾城（山古城）のある秋葉山を望む



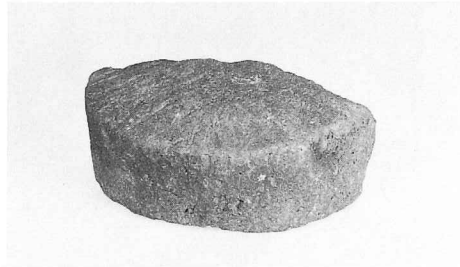
15-13



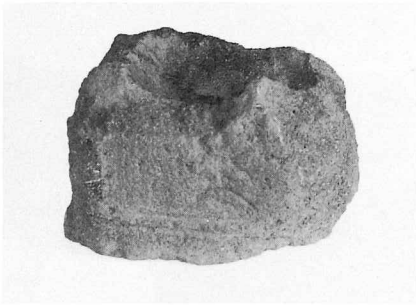
15-12



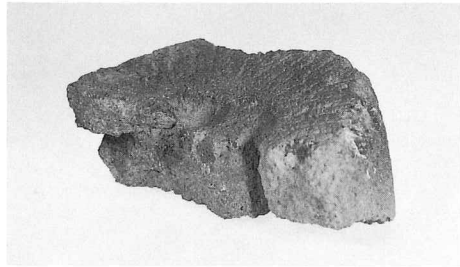
15-12·13



14-1



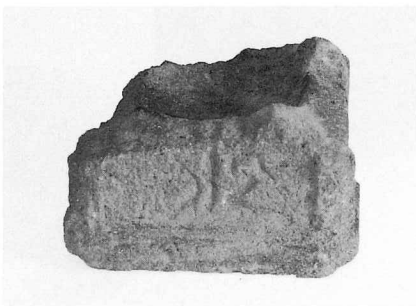
16-14



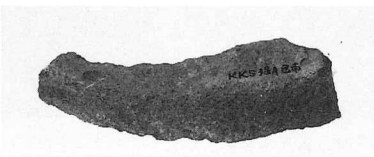
16-15



18-33

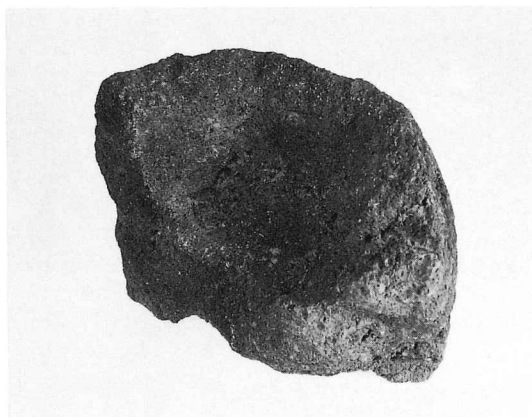


16-14





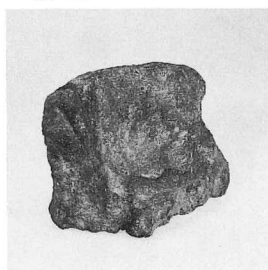
18-34



15-11



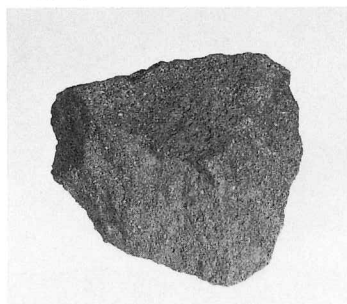
15-9



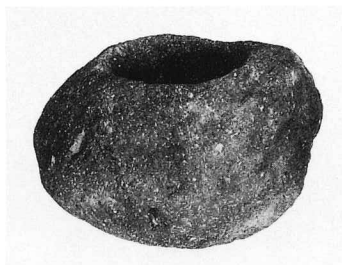
15-11



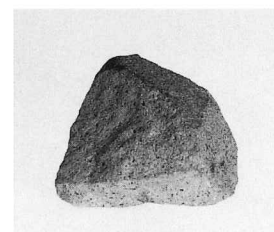
15-10



18-30



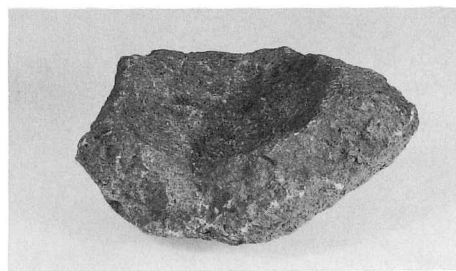
14-8



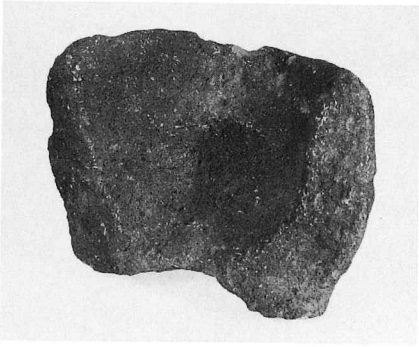
28-139



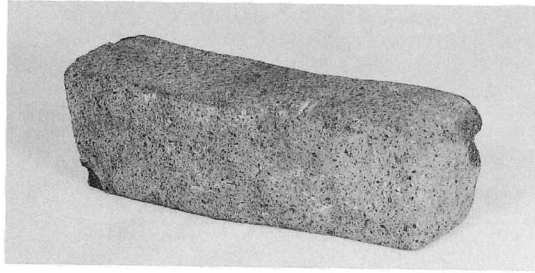
17-22



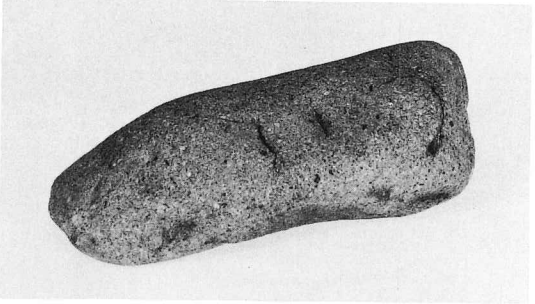
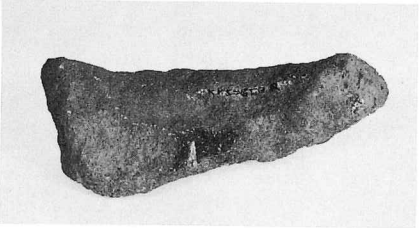
18-48



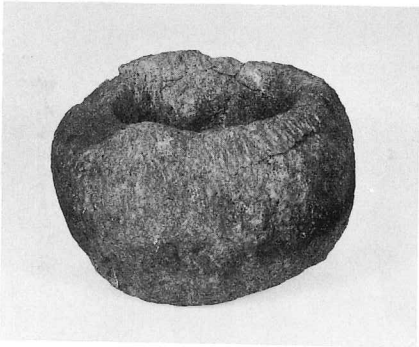
14-5



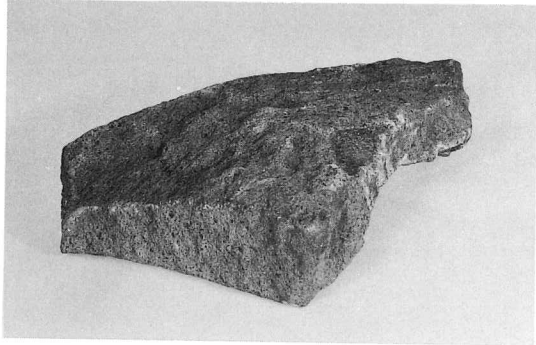
19-40



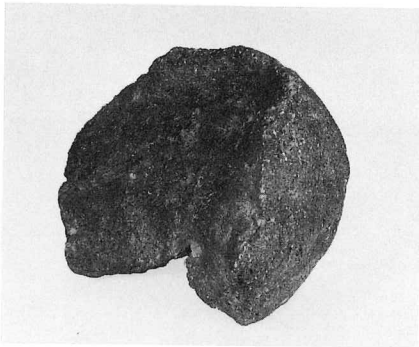
17-25



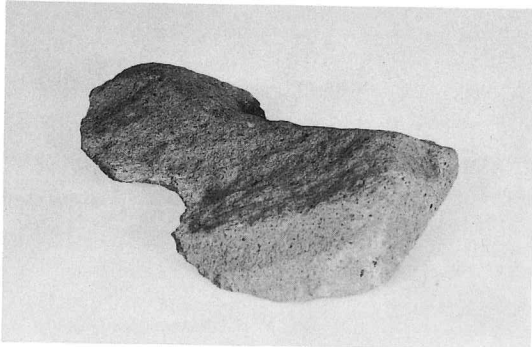
14-8



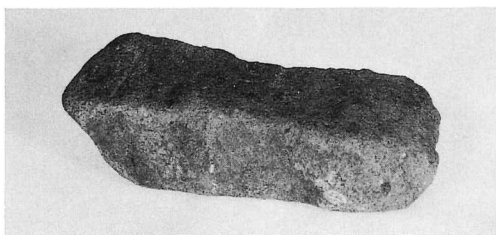
17-23



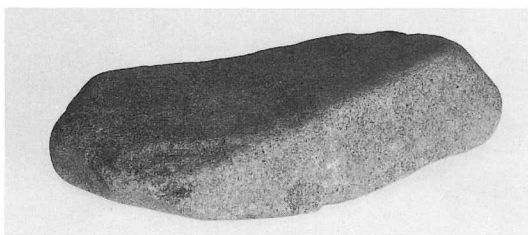
14-6



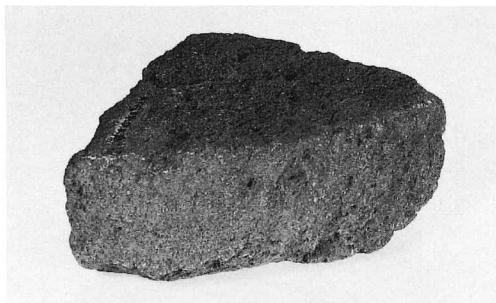
29-148



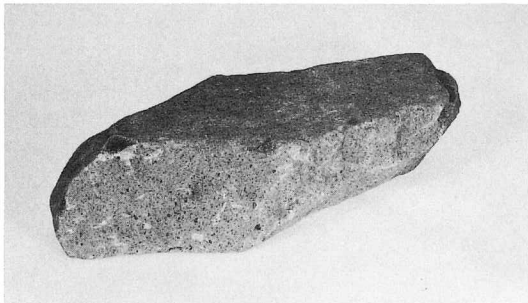
27-131



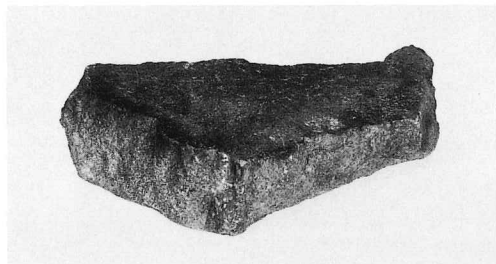
17-26



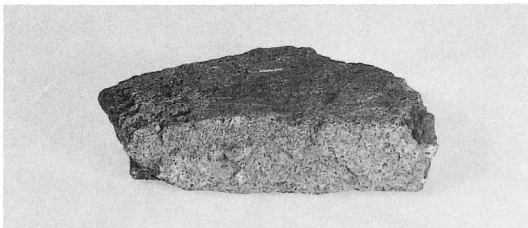
14-2



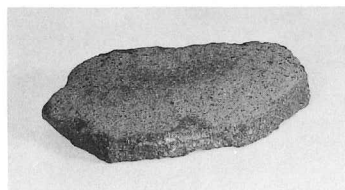
14-7



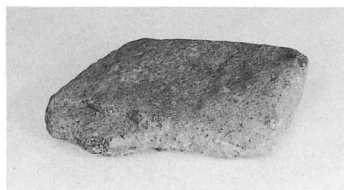
19-41



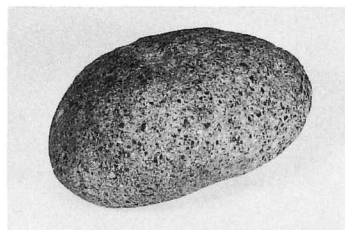
20-140



20-47



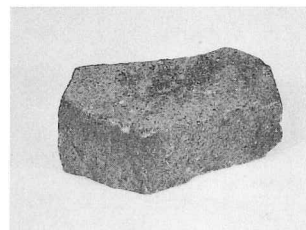
28-137



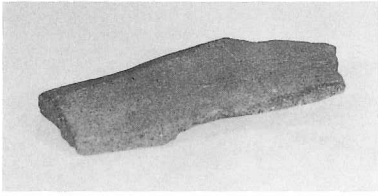
26-119



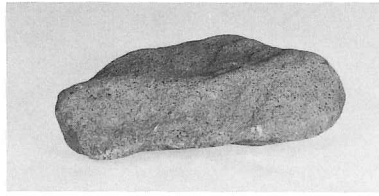
29-149



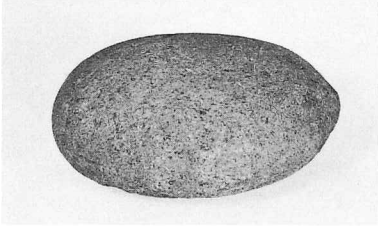
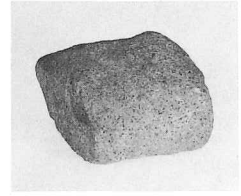
21-58



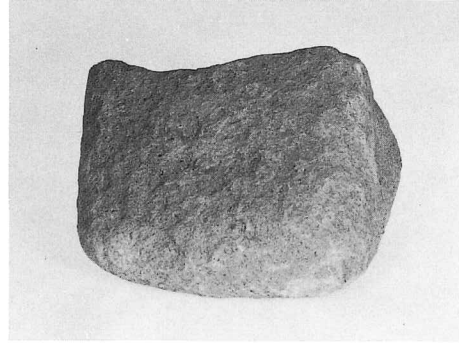
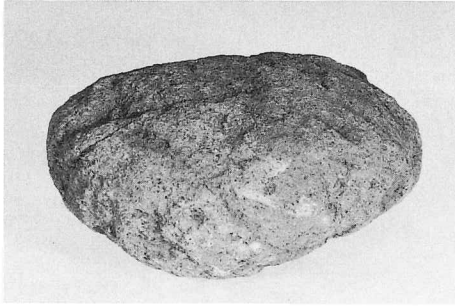
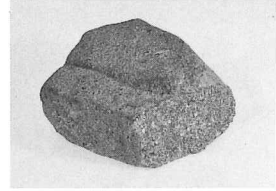
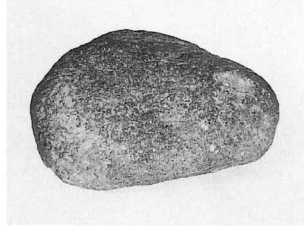
17-27



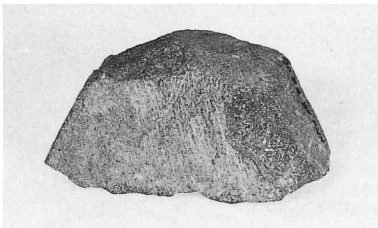
16-16



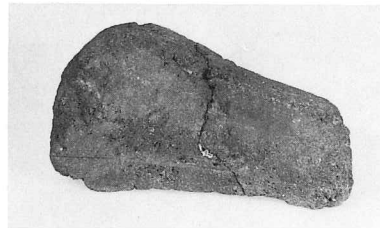
27-129



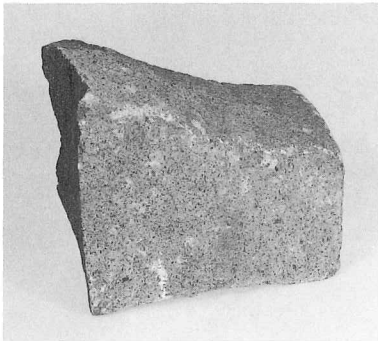
26-120



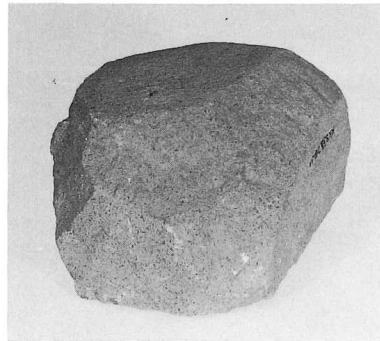
20-48



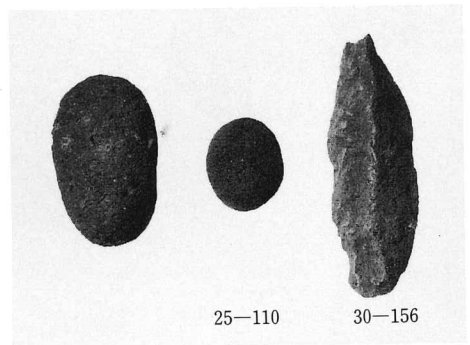
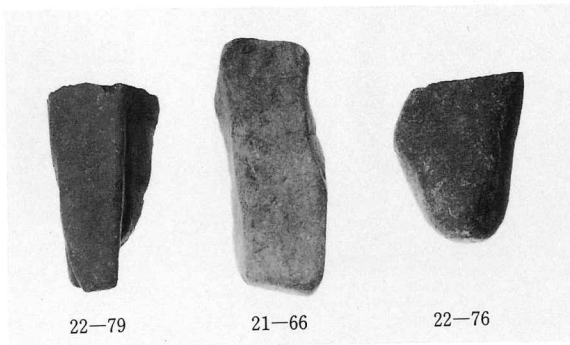
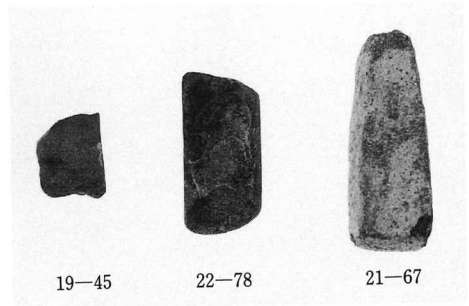
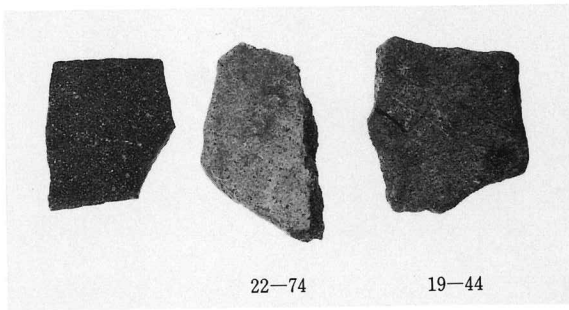
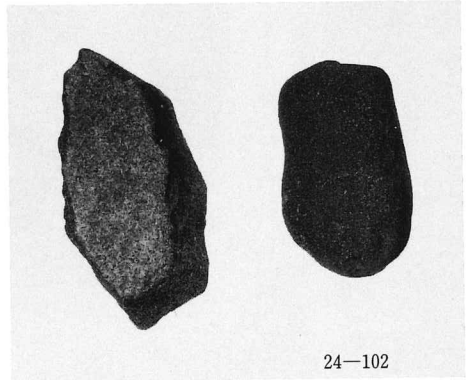
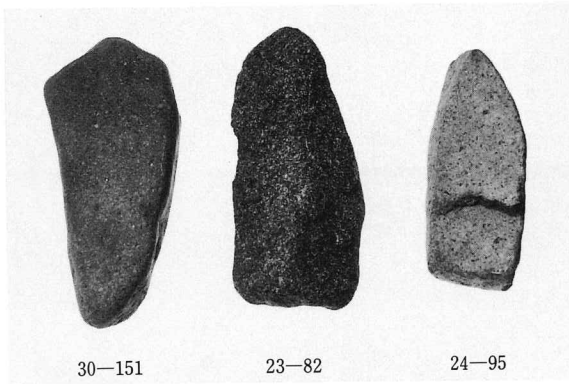
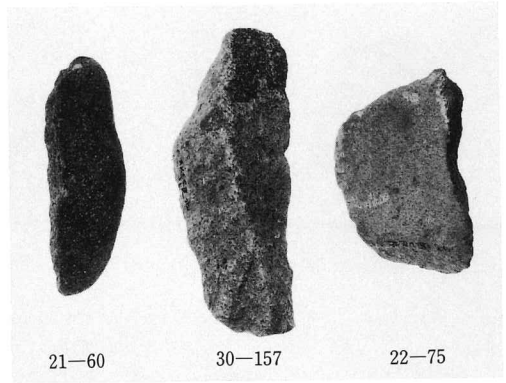
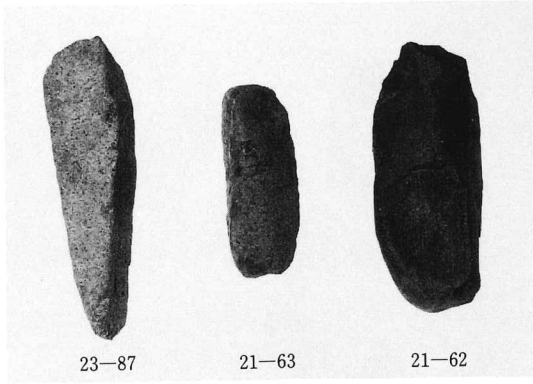
19-38

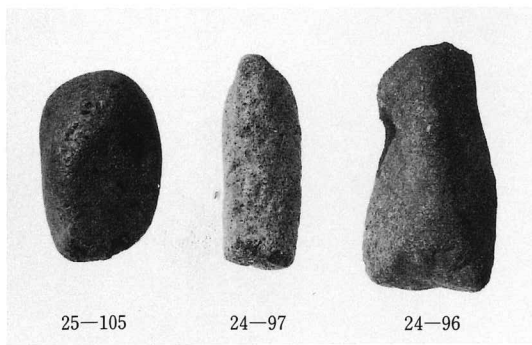
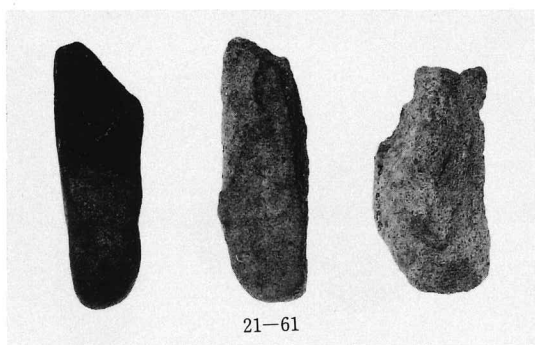
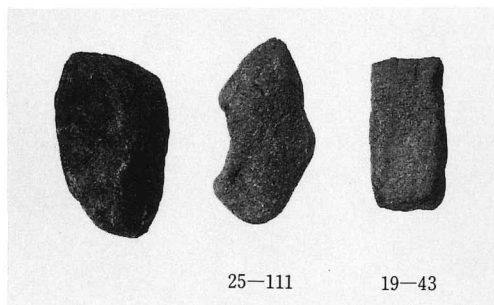
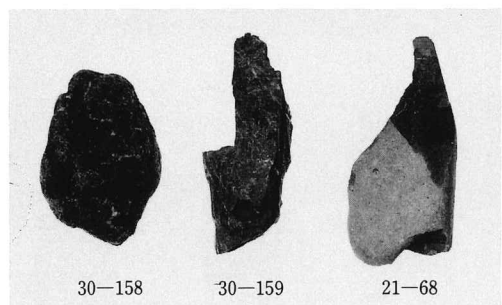
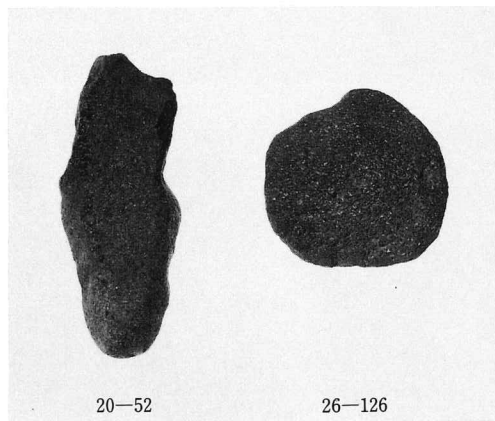
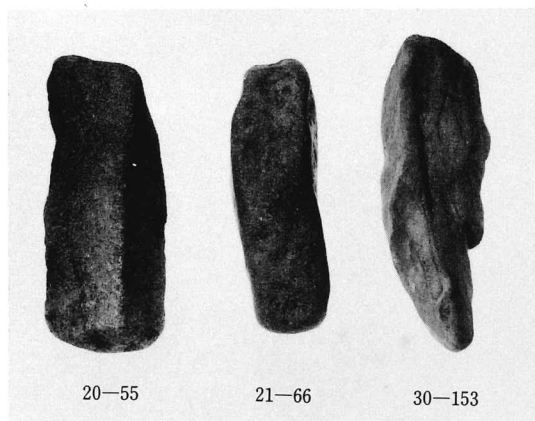
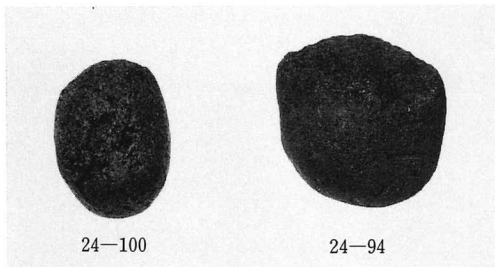
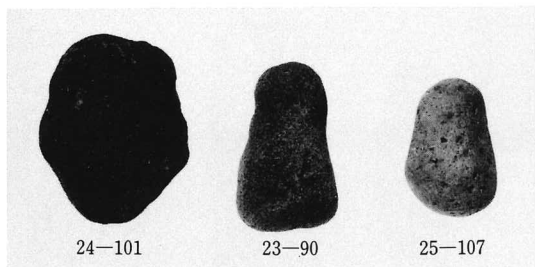


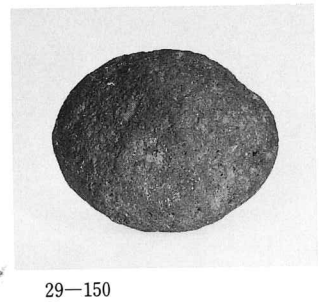
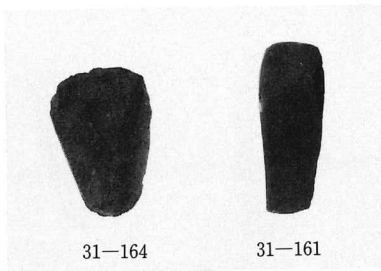
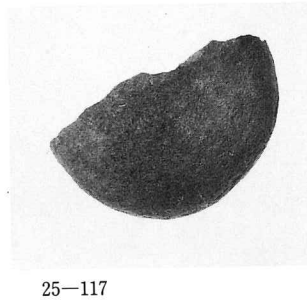
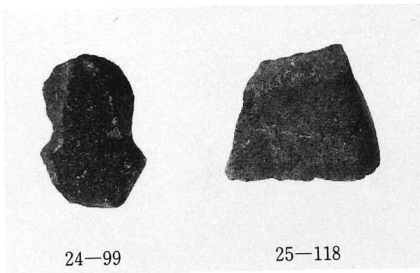
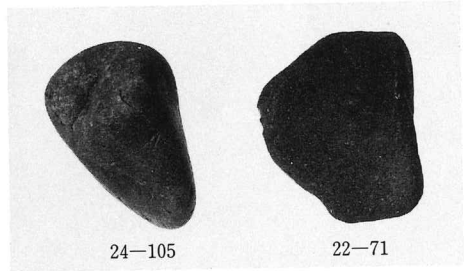
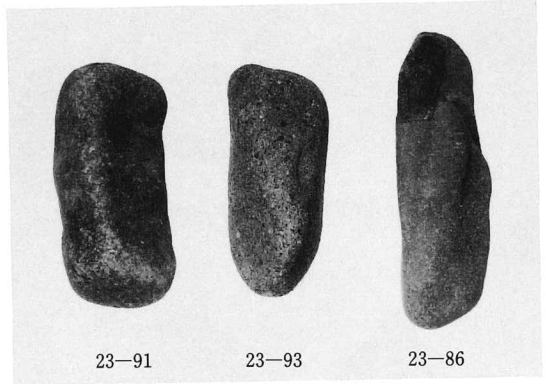
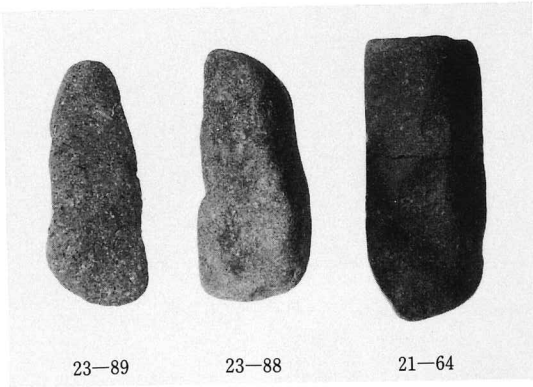
28-144

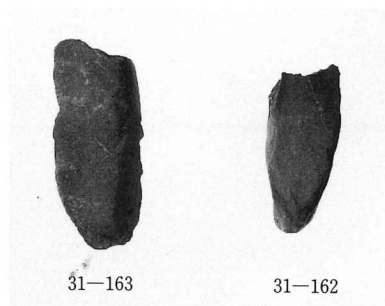
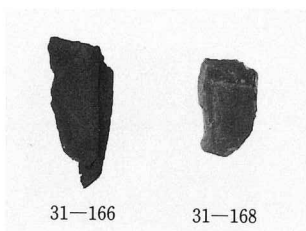
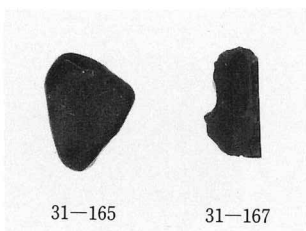
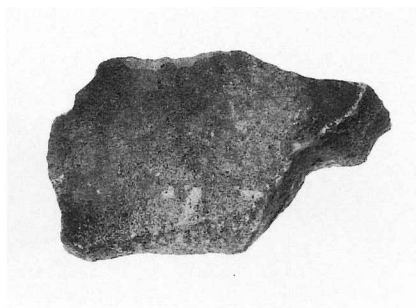
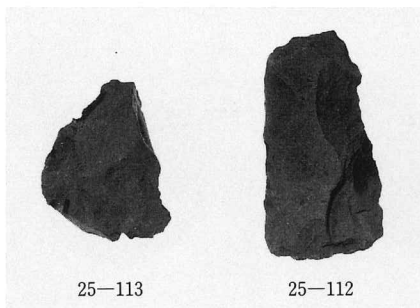
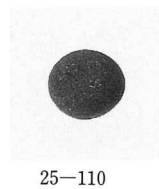
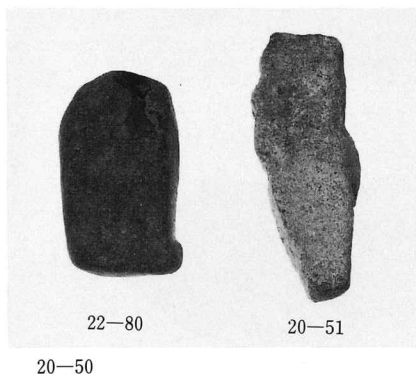
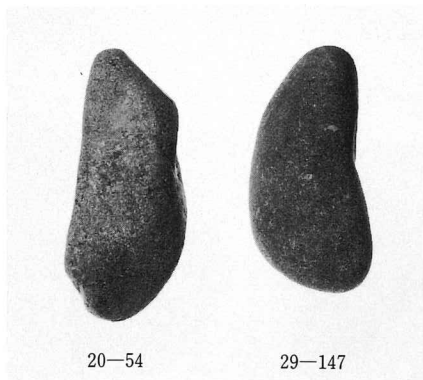
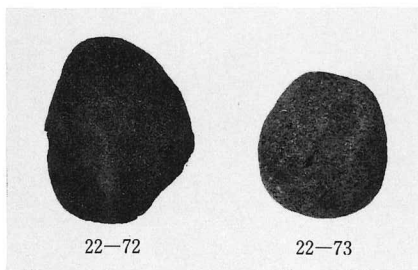
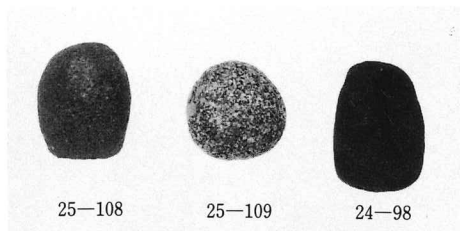


17-19







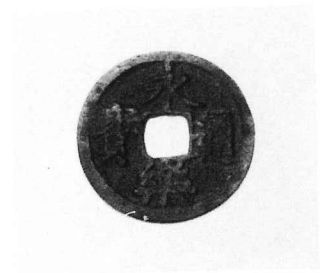




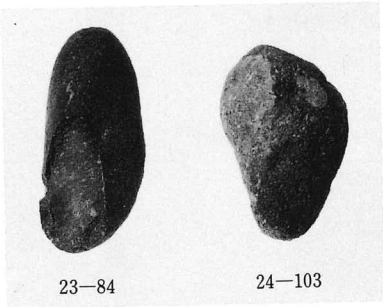
19-46



26-126



32-7

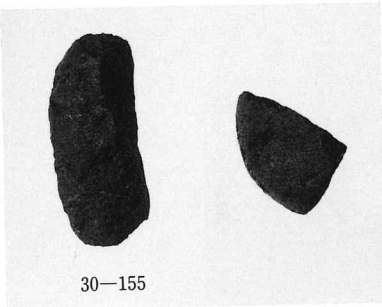


23-84

24-103



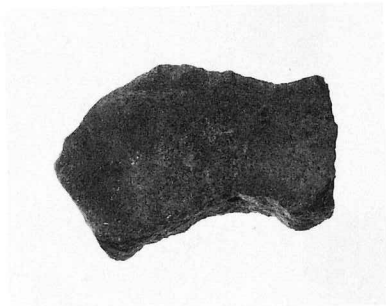
掘出土馬骨



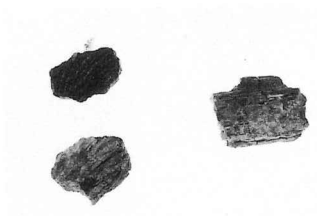
30-155



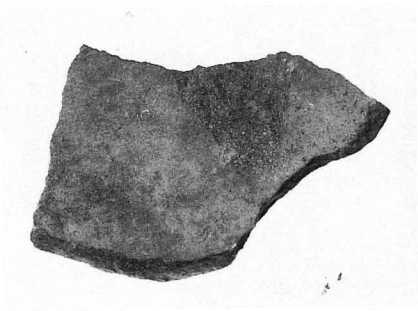
掘出土馬骨



馬齒



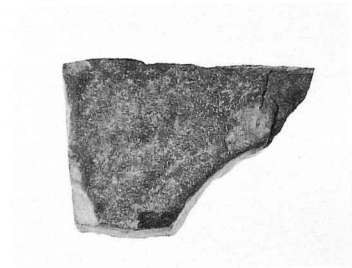
掘出土炭化材



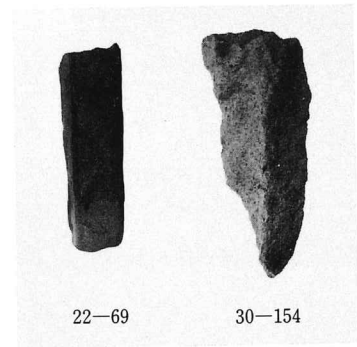
19-42



29-146

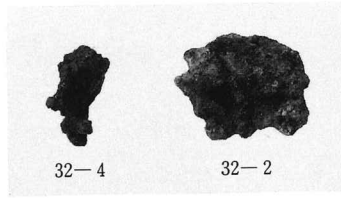


20-56



22-69

30-154

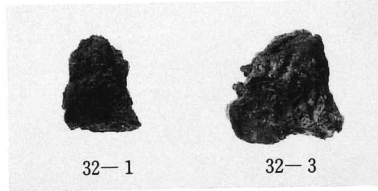


32-4

32-2

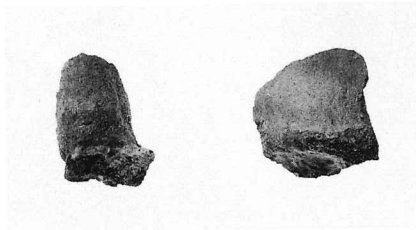


31-169

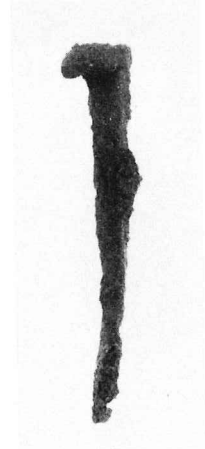


32-1

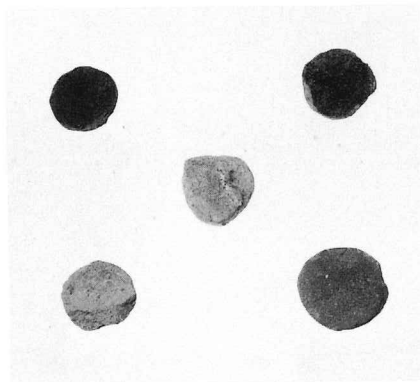
32-3



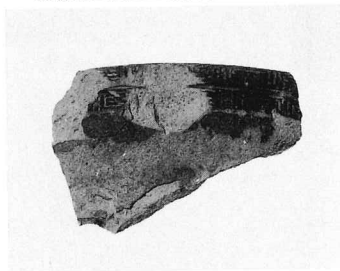
羽口



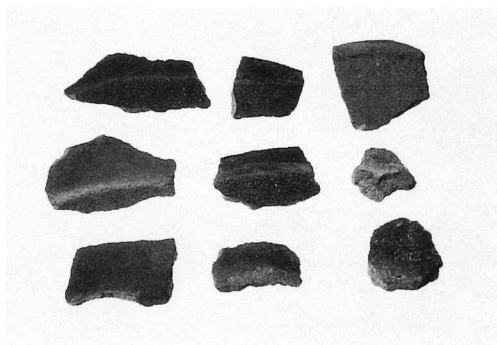
32-6



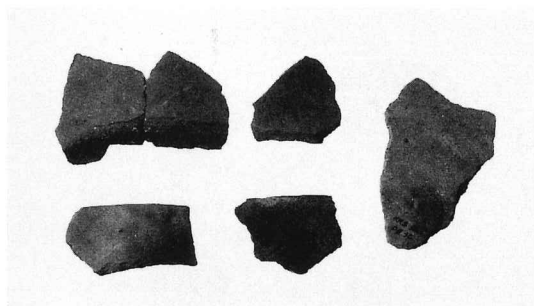
堀各地区出土土製円板



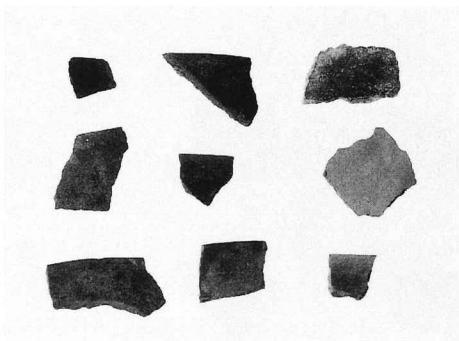
33-14



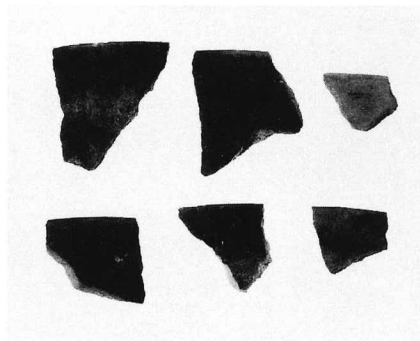
掘出土内耳土器



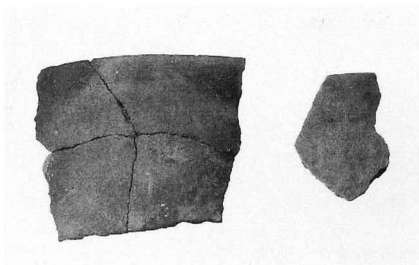
掘出土内耳土器



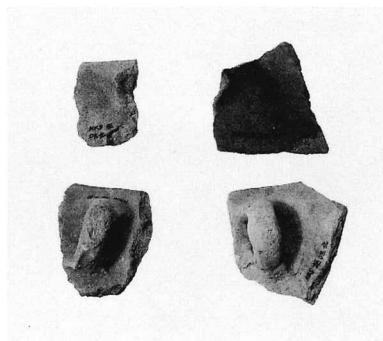
掘出土内耳土器



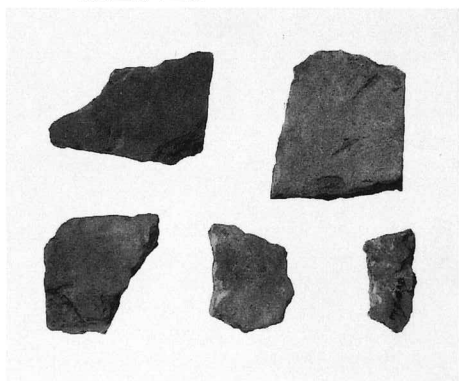
掘出土内耳土器



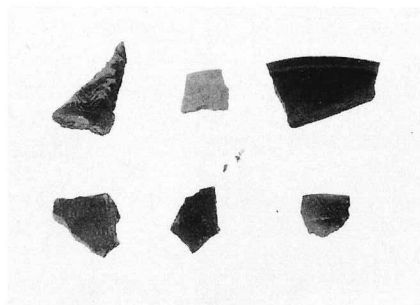
掘出土内耳土器



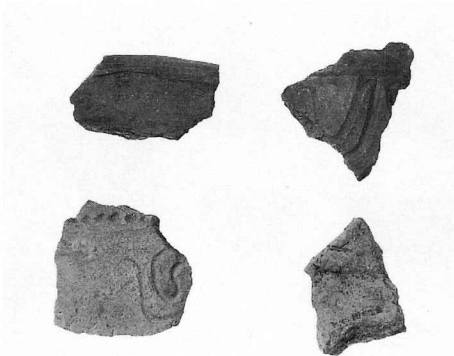
掘出土内耳土器



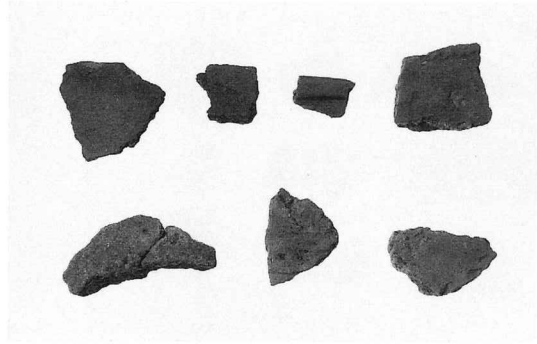
掘出土瓦



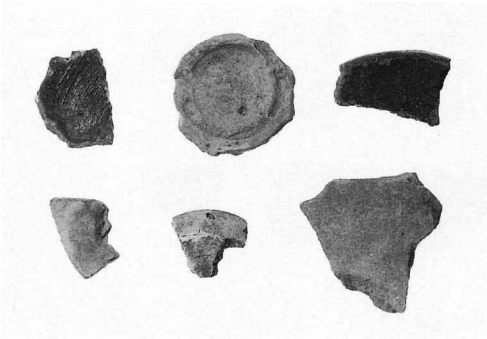
掘出土須恵器他



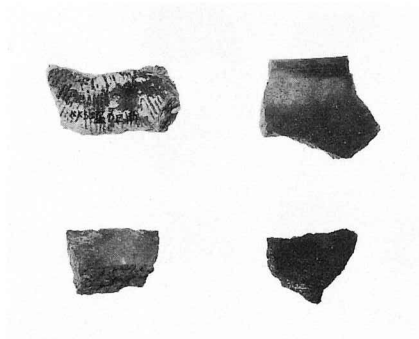
土壘出土繩文土器



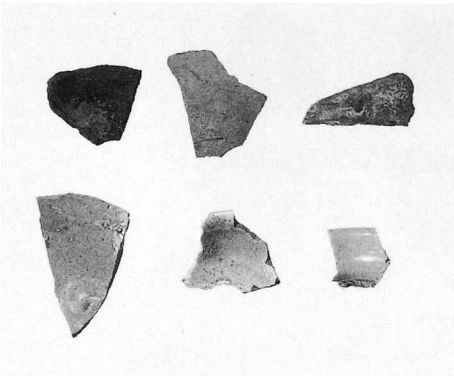
土壘出土繩文土器



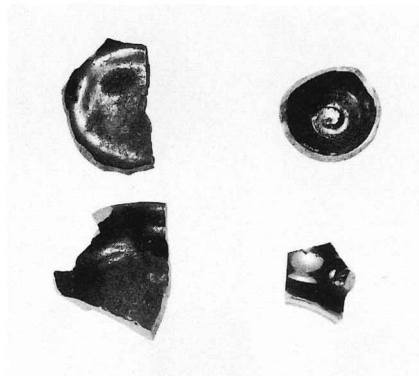
堀出土土師器・土師質土器他



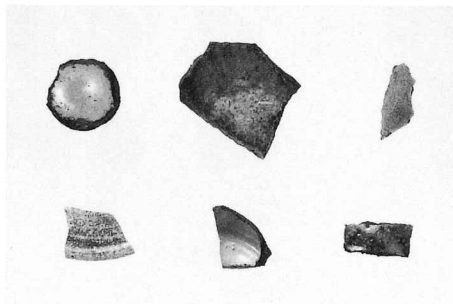
堀出土土師質土器他



堀出土陶器



堀出土陶器



堀出土陶器



平尾富士山頂より佐久平西～南方を臨む



守芳院遠景



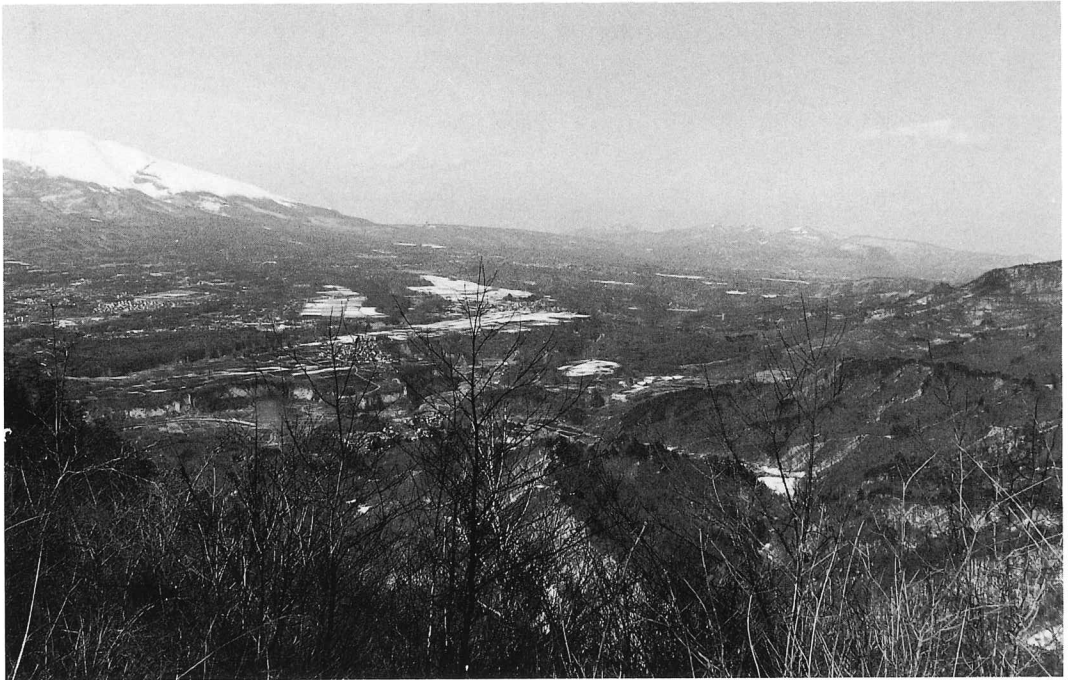
平尾大社



平尾大社



平尾富士山頂の白山権現（大正時代に白山山頂より移動）



平尾富士山頂より佐久平北方を臨む



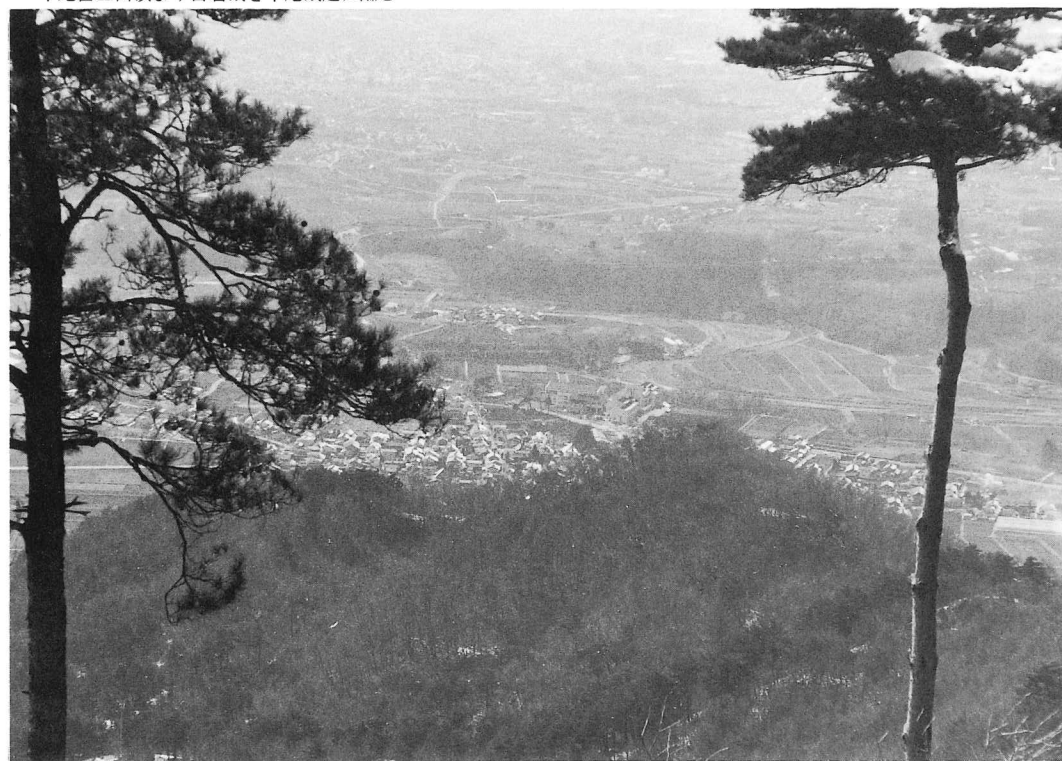
平尾富士山頂より平尾城を臨む（東より）



平尾城の残存する二段の帯曲輪（東より）



平尾富士山頂より白岩城を平尾城越に臨む



平尾富士山頂より平尾城を臨む

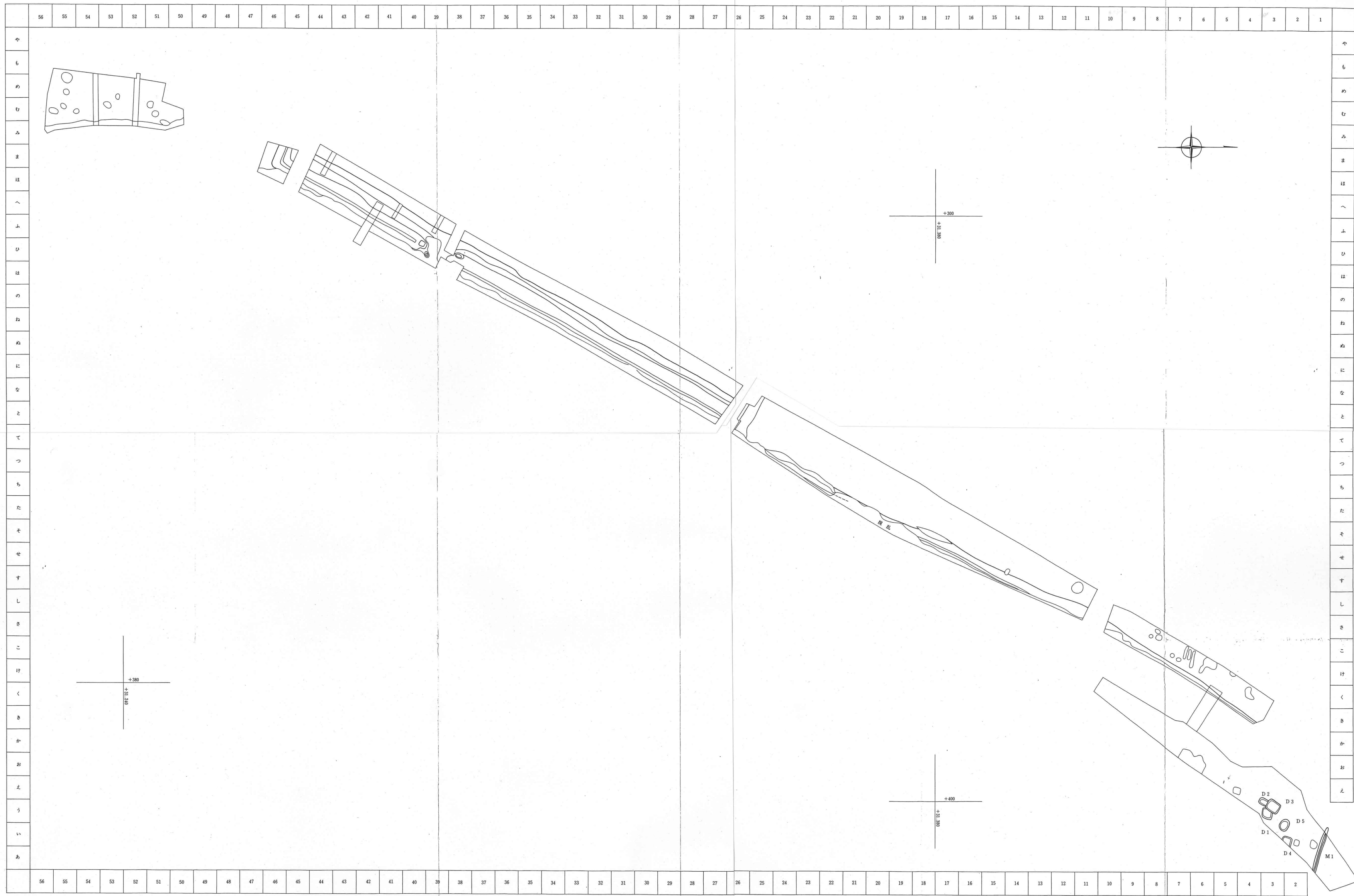


白岩城遠景（西より） 白色（ローム）の断崖

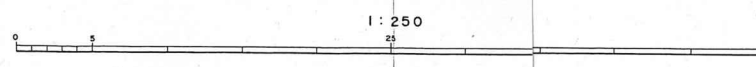


白岩城・白山・秋葉山（平尾城）・平尾富士を臨む





撮影 昭和三十九年十月十五日
測図 平成元年一月



付図2 白岩城跡調整区全体図

参考文献

- 佐久市教育委員会 1986 『大井城跡』(黒岩城)
" 1984 『大井城』(大井城関係文献史料集)
" 1988 『大井城跡』(黒岩城・王城・石並城)
" 1985 『鑄師屋遺跡』
" 1988 『鑄師屋遺跡II』
- 小諸市教育委員会 1986 『耳取城跡・古城遺跡』
浪岡町教育委員会 1986 『浪岡城跡VIII』
八戸市教育委員会 1983 『根城跡』
御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
榎澤龍吉 1987 『平尾守芳とその一統』
平根小学校 1978 『平根村誌』
長野市教育委員会 1987 『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
上ノ国町教育委員会 1986 『上之国勝山館跡VII』
" 1987 『上之国勝山館跡 VIII』
" 1988 『上之国勝山館跡 IX』
- 高槻城遺跡調査会 1987 『高槻城三ノ丸発掘調査概要報告書』
福島県教育委員会 1981 『梁川城跡』
佐久市教育委員会 1984 『佐久市遺跡群詳細分布調査報告書』
長野県教育委員会 1983 『長野県の中世館跡一分布調査報告書一』
小諸市教育委員会 1988 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

白岩城跡

長野県佐久市上平尾白岩城跡発掘調査報告書

1989年3月

編集者 白岩城跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

佐久市大字中込3056

電話0267-62-2111(代)

印刷所 ほおずき書籍株式会社